

年報 2023



Vol.16



医療法人財団 華林会
村上華林堂病院

巻 頭 言

医療法人財団華林会 村上華林堂病院

理事長 菊池仁志

2023年度の年報をお届けさせていただきます。

4年近く続いた新型コロナウイルスによるパンデミックも少しずつ静まってきました。完全終息には至っていませんが、街は賑わいを取り戻してきました。これからは、感染症対策は当然のことながら、ポストコロナ時代として新たな問題に取り組んでいかなければなりません。2023年度は、5月8日に新型コロナウイルスが2類相当から5類に引き下げられ、行動制限がなくなったことは大きな出来事でした。ワクチンや治療薬の開発が急速に進められたのは、科学の進歩によるところが大きいと思われます。それは生成AIの急速な進化にも言えることで、ますます世の中が大きく変わっていくことでしょう。そして、日本も遅ればせながらデジタル化が急速に押し進められ、それは医療の政界にも押し寄せてきています。また、これまでは表に出ることのなかったジャニーズの性加害問題やビックモータの保険金不正請求など巨悪が崩れ去るという現象も大きな時代の変化でありました。2024年に入るや否や、能登半島地震が起こり、厳しい年の始まりとなりました。世界を見るとウクライナの戦争は終結の気配が見えず、さらにイスラエルとパレスチナの問題も噴出してきました。以前はグローバルな世界と謳われていたものが、コロナの時代を経てまた混沌としてきた感があります。

医療の世界もこれから2025年に団塊の世代が後期高齢者へ突入するにあたり、人口減少や高齢化は着実に進んでいきます。そして、第8次医療計画においては、効率的・効果的に持続可能な地域医療提供体制の構築が進められていきます。コロナ禍前より取り組まれてきた、地域包括ケアシステムや地域医療構想に加え、働き方改革の推進、医療DXの推進など新しい課題にも取り組んでいかなければなりません。

村上華林堂病院では、2023年4月より山田猛先生が新たに病院長に就任いたしました。山田院長のもと新しい体制となり、さらなる診療体制の充実が図られてきました。私どもの理念は、地域の人に寄り添い、終末期まで心のこもった医療を提供することです。変わりゆく世情や国の医療政策に従いながらも基本的な理念を崩すことなく、地域医療に尽くしていければと考えています。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

巻頭言	2
目次	
病院長挨拶	5
病院概要	
✿ 概要と沿革	
✿ 組織図	

[統計資料](#)

- ✿ 外来患者数 入院患者数
紹介患者数

診療科案内	7
✿ 総合診療科内科	7
✿ 血液・腫瘍内科	8
✿ 脳神経内科	9
✿ 循環器内科	11
✿ 緩和ケア科	14
✿ 呼吸器内科	16
✿ 消化器内科	18
✿ 整形外科	20
✿ 在宅診療部 在宅診療科	22
✿ 健康増進・糖尿病センター	24
✿ 腎臓内科・血液浄化療法センター	26
✿ 眼科・アイセンター	29

医療技術部	31
✿ 薬剤科	31
✿ 臨床工学科	32
✿ 臨床検査科	33
✿ 栄養管理科	35
✿ リハビリテーション科	36
✿ 放射線科	39

看護部	40
✿ 看護部	40
✿ 2階北病棟	42
✿ 2階南病棟	43
✿ 3階病棟	44
✿ 新4階病棟	45
✿ 緩和ケア病棟	47
✿ 中央材料室・手術室	48
✿ 外来	50

在宅療養部	51
✳ 訪問看護ステーション	51
✳ 居宅介護支援事業所	52
✳ 訪問リハビリテーション	54
✳ 通所リハビリテーション事業所（デイケア）	55

事務部	56
✳ 総務課	56
✳ 医事課	57
✳ 地域連携室	58

委員会活動	61
✳ 医療安全管理委員会	61
✳ 転倒・転落防止対策委員会	66
✳ 指差し呼称委員会	67
✳ 院内感染対策委員会	69
✳ 院内教育委員会	71
✳ サービス向上委員会	72
✳ N S T 兼栄養管理委員会	73
✳ 褥瘡対策委員会	74
✳ 認知症ケアチーム	75
✳ 地域振興委員会	76

サービス付き高齢者向け住宅かりん	77
サービス付き高齢者向け住宅かりん	
（訪問介護事業所かりん、通所介護事業所かりん）	

業績	79
・学会・研究発表・講演等	79

TQM 活動	81
---------------	-----------

病院長挨拶

医療法人財団 華林会
村上華林堂病院

病院長 山田 猛

2020年、私が当院に勤務し始めたときは、地下鉄七隈線のターミナルの橋本駅から当院に至る南側はのどかな田園地帯でありました。2023年3月27日地下鉄七隈線が博多駅まで延伸し、橋本駅周辺の再開発が始まりました。天神地区の大規模な再開発には及びませんが、周辺地域の活性化が進むことが期待されます。天神・博多駅に通勤する若い人々が増えることも明るい未来につながるものと思います。当院もこの地域の発展に貢献できるように努めます。

2023年度は新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、医療を含め社会生活がコロナ前の状況に戻りました。経済活動が活気づくことで、人々の生活は豊かになります。円安、物価高騰に引っ張られて大企業中心に労働者の賃金が上昇してきましたが、医療・介護の分野では賃金の引き上げは国が決める報酬に従わざるをえません。2024年度から診療・介護・障害者サービスの報酬が改定され、職員の処遇改善が求められています。当院でも労働に見合った報酬を提供し、生活の喜びを感じられる職場づくりを目指します。

当院は地域のかかりつけ病院であり、地域住民の健康を守る役割を果たしています。高齢化した地域では医療機関のみでは対応できず、介護施設、障害者施設や行政との連携が必須です。今回の報酬改定でも医療と介護の連携を強化・促進することが求められています。当院では以前から介護と医療の連携の集いを開催してきました。2023年度はWEB開催のみでしたが、コロナ感染症、認知症、緩和ケア、災害対策をテーマに4回開催し、参加施設から好評をいただきました。今後は実開催も取り入れて連携の強化に努めますので、ご参加よろしくお願いいたします。

診療情報のデジタル化の促進が求められ、マイナンバーカードに医療情報を紐づけることで、効率的で安全な医療の提供に役立つものと期待されます。日本は生活のデジタル化において先進国の中では遅れていることもあり、多くの国民が納得できるように利用を進めていただきたいと思います。人工知能(AI)技術も急速に進歩しており、診断・治療の支援に大いに役立つものと期待されますが、患者さんに直に接して言葉をかわすことを疎かにしてはなりません。

2024年1月1日に能登半島地震が起きました。被害にあわれた方々にはお見舞い申し上げますとともに、復興が少しでも早く進むことを願います。自然災害はどこでも起こります。人命を守る医療機関は災害に強くなければなりません。日頃から防災を意識し、危機的状況においても病院機能が維持できるよう計画・対策を準備してまいります。

当院は開院から 42 年が過ぎ、地域に根付いた病院と認識していますが、より多くの皆様に親しんでいただけるように、広報活動にも力を入れてまいります。病院玄関前には花梨(かりん)の木があり、その実を模したマスコットキャラクター「かりんくん」を作成しました。看板やホームページに登場いたしますので、当院の知名度向上に貢献してくれるものと期待しています。

総合診療科内科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

総合診療科内科部長 柴田 隆夫（総合内科専門医、病院総合診療学会認定医）

総合診療科内科は、2023 年度 18 名の常勤医師・9 名の非常勤医師で診療を行っており、新患総合外来、各専門外来、検査、入院治療を行っております。当院の特徴としては、地域に根差した診療を主体として、消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、血液内科、神経内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科の主要専門医がそろい、様々な疾患の患者様に対応させていただいております。神経難病、悪性腫瘍の患者さんも増えてきております。コロナ感染症にて一般診療が影響を受けていましたが発熱、上気道症状患者に対する検査、診療体制を充実させ動線を分離し内科診療への影響を最小限にいとめ本来の診療の回復に努めました。本年度は各病棟で入院が必要な感染症患者さんの治療を行いました。従来の専門性縦割りの内科から全人的医療を行うべく総合診療科内科を基本として診療し地域における当院の役割を果たし、近隣医療機関や施設、地域の皆さんとの連携を大切にして、より良い医療を提供するべく努力していく所存です。

（柴田 隆夫）

2. 臨床実績

2023 年度	主な内科疾患入院患者（延べ人数）
症例別入院患者数	総計 1461 名
循環器内科疾患	159 名、
消化器内科疾患	127 名
神経内科疾患	465 名
呼吸器内科疾患	179 名
血液内科疾患	96 名
悪性新生物疾患	65 名
内分泌・代謝疾患	64 名
腎・泌尿器疾患	109 名
その他	196(うち COVID 19 患者 14)名

血液・腫瘍内科

1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

血液腫瘍内科部長 柴田 隆夫

非常勤医師 高松 泰（福岡大学病院 腫瘍・血液・感染症内科教授）

2. 臨床実績

年間疾患診療（2023/4/1-2024/3/31）

血液悪性疾患(96例) (うち入院51例)

1. 悪性リンパ腫	42(19)例
2. 多発性骨髄腫	16(12)例
3. 急性骨髄性白血病	9(9)例
4. 成人T細胞性白血病/リンパ腫	5(2)例
5. 骨髄異形成症候群	8(6)例
6. 慢性骨髄性白血病	7(1)例
7. 慢性リンパ性白血病	3(0)例
8. 原発性マクログロブリン血症	3(2)例
9. 本態性血小板血症	3(0)例

血液良性疾患(14例) (うち入院4例)

1. 再生不良性貧血	5(1)例
2. 特発性血小板減少性紫斑病	7(3)例
3. 原発性アミロイドーシス	1(0)例
4. 特発性赤芽球癆	1(0)例

3. 1年間の活動と今後の展望

当院では比較的高齢の血液悪性疾患の方が多く、活動度に支障をきたしていることが多いため、入院して専門的な治療を行いながらリハビリテーションを進めていき、活動性に改善が得られれば外来化学療法に訪問看護、訪問診療などを活用していただき在宅療養までバックアップし、合併症などで治療の必要が生じたときにはいつでも緊急入院していただける態勢を整えています。最近急性骨髄性白血病に新規治療が保険適応となり今年度は初回から化学療法を導入する方がおられます。また難治、再発の血液悪性疾患や固形腫瘍の方では、緩和的化学療法や疼痛コントロールを中心とした緩和医療にも重点をおき、プライマリーケアも含めてトータルライフケアのできる診療部門を目指して医療スタッフがチームを組んで取り組んでいます。

（柴田 隆夫）

脳神経内科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

理事長	菊池 仁志
脳神経センター長	山田 猛
脳神経内科部長	谷脇 予志秀
医 師	田村 重征
医 師	佐藤 真依
兼任医師（在宅診療部）	田代 博史
兼任医師（在宅診療部）	古田 興之助
その他	非常勤医師

2. 臨床実績

2023 年度 神経系疾患（2023 年 4 月～2024 年 3 月入院患者）	
パーキンソン病（含：分類不能症候群）	254
多系統萎縮症	46
進行性核上性麻痺	23
大脳皮質基底核変性症	11
脊髄小脳変性症	32
筋萎縮性側索硬化症	25
認知症	33
多発性硬化症・視神経脊髄炎	18
脳症・脳炎	12
筋疾患・重症筋無力症	9
脳血管障害	26
脊髄・脊椎疾患	5
プリオン病	2
てんかん	8
めまい症	4
頭部外傷	1
その他	56
計	565

3. 1 年間の活動と今後の展望

当院の脳神経内科は、外来・入院ともパーキンソン病、パーキンソン症候群、筋萎縮性側索硬化症などの神経難病を主に診療しています。大学病院や総合病院からの紹介が多く、神経疾患の分野で地域医療に貢献しています。入院診療実績は、障害者施設等一般病棟(34床)での神経変性疾患患者が 7 割を超えています。疾患構成は従来通りで、パーキンソン病およびパーキンソン症候群が多いです。入院での集中的なリハビリテーションによる機能維持、定期的なレスパイト入院による在宅療養の支援を行っています。肺炎、尿路感染症など

の合併症治療、転倒による骨折の保存的治療や他院での手術治療後のリハビリテーションにも対応しています。胃瘻栄養や人工呼吸器を希望されない筋萎縮性側索硬化症患者さんで、在宅療養や介護施設で対応困難な場合には、当院での看取りも対応していきます。リハビリテーションスタッフは充実しており、特にパーキンソン病に特化した LSVT (Lee Silverman Voice Treatment) は患者から高評価を得ています。進行性の神経難病では期限はありませんので、長期の通院リハビリテーションが提供できています。当院では、大学病院や急性期病院では経験できない慢性期や進行期の神経難病の療養について学ぶことができ、九州大学および福岡大学の医学部生の臨床実習に協力しています。神経難病の治験やケアの向上に役立つ臨床研究は進めていきたいと考えています。脳神経内科専門医療機関の少ない福岡市西部～糸島地区において、当院は脳神経内科の地域医療を近隣の医療機関とともに支えています。

(山田 猛)

循環器内科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在） 敬称略

副院長・循環器内科部長	星野 史博
リハビリ科部長	白井 和
血管外科部長	藤井 満
非常勤医師	田代 浩平（福岡大学病院 循環器内科）
非常勤医師	有村 忠聡（福岡大学病院 循環器内科）
非常勤医師	桑野 孝志（福岡大学病院 循環器内科）
非常勤医師	和田 秀一（福岡大学病院 心臓血管外科教授）

2. 臨床実績

循環器専門医研修関連施設および高血圧学会認定研修施設を維持し、循環器専門医 2 名・心臓血管外科医 1 名、非常勤の循環器内科専門医 3 名（福岡大学病院）・心臓血管外科医 1 名（福岡大学病院）の体制で外来診療および病棟業務を継続しました。心臓リハビリテーション（以下、心リハ）は、平成 25 年 1 月から心大血管疾患リハビリテーション科 I(心 I)の施設基準を維持できています。

Key Word ; 治療抵抗性心不全、心不全ステージ分類、心不全パンデミック

外来：

患者数は年間総数 7011（前年 6995）（月の平均：582 名（前年 533）名、非常勤医師を含む）でありと前年より微増し、これには循環器常勤医師の増員が影響したと考えられます（表 1）。

一方で心リハ対象者は 21~41 名/月程度を確保でき、近隣の高次医療機関（福大循環器内科・心臓血管外科や福岡記念病院、九州医療センターなど）を中心とした転院患者が前年度と同様に確保でき稼働を維持出来ました。引き続き感染対策に病院をあげて一層の努力を行いつつ、地域支援病院として今後も更なる増患に対応できるよう取り組んでいきます。

入院：

循環器疾患の入院総数は、159 名（前年 159 名）と安定していました。入院の内訳として高齢者の心不全（HFpEF）の再発症例や心不全急性期治療後の心リハ対象者（特に維持血液透析患者や心不全ステージ D などの自宅退院困難例）が多数を占め、心不全の基礎疾患として心房細動などの不整脈や左室拡張障害、弁膜症、慢性腎不全の増悪に伴うものが多数でした（表 2）。

入院加療を必要とした心不全症例は 97 名（前年 97 名）と増減はなく、その中でも入院退院を繰り返す心不全ステージ C に該当する高齢者の心不全患者が明らかに増加しました。その背景には、covid19 感染を警戒した患者が自宅での生活や受診控えとなりフレイルに移行し、更には適切なタイミングでの受診が出来なくなったなどの特殊な生活環境下にあった影響が持続している、と拝察されました。

尚、入院および外来の心リハ対象者は、入院 88 名（前年 97 名/年）と減少、外来 218 名（前年 203 名/年）と微増（表 3）しましたが外来での心リハは今後で増加する、と期待して

います。自宅退院が困難な症例に対しましては当院の大きな特徴である在宅診療および訪問看護への移行や近隣の療養型病床への転院、当院関連の施設であるサービス高齢者住宅“かりん”への入所など当院地域連携室を介した流れを強化していく所存です。

検査：

循環器医師の増加により昨年より心臓超音波検査は増加しており（表 4）、検査技師の技術向上に裏付けられた質の向上は継続できており今後も安定した実績を堅持する体制が出来ています。

手術：

ペースメーカー移植術（PMI）の対象となる症例（電池交換術を含む）は 24 件（前年 33 件）と減少しておりました（表 5）。当科ではクリーンルーム下での PMI 施行であり術後感染などの合併症は殆どなく、今後も積極的にデバイス治療に取り組む所存です。

表 1 2023 年度 循環器科外来延べ患者数

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計	平均
596	536	602	567	606	600	576	558	613	564	595	598	7011	584.25

表 2 2023 年度 循環器系疾患退院 延べ患者数

心不全	97	
ペースメーカー電池消耗	12	
虚血性心疾患	9	
心房細動	7	
高血圧症	6	
房室ブロック	5	
大動脈弁狭窄症及び閉鎖不全症	5	
大動脈瘤及び解離	3	
心筋症	3	
洞不全症候群	3	
その他	9	※該当者数が 3 名以上の病名を挙げています
総 数	159 名	※2 名以下の病名は [その他] に入れています

表 3 2023 年度 心大血管算定患者数（件数）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
外来	14	17	18	18	18	19	18	17	20	17	19	23
入院	11	9	6	7	7	6	6	4	13	14	7	8

表 4 2023 年度 検査件数

心エコー	852 件
A B P M	12 件
C A V I	261 件
経食道エコー	5 件
運動負荷心電図	7 件
ホルター心電図	166 件
中心血圧	103 件

表 5 2023 年度 ペースメーカー手術件数

ペースメーカー移植術	12 例
ペースメーカー交換術	12 例
体外ペースメーカーキング	1 例

3. 1 年間の活動と今後の展望

昨年と同様に covid19 感染拡大に伴い、外来や入院での通常診療や転院調整において制限があり非常に患者さまや近隣医療機関の皆様には迷惑をかけた 1 年であった。

本年は心臓血管外科医 1 名が入職の加えて、福岡大学病院からの非常勤医師（循環器内科、心臓血管外科）派遣にて専門外来は充実しており、福岡大学病院などの高次医療機関との密なる連携、近隣の療養型病床を有する医療機関や施設などとのスムーズな連携しつつ心不全パンデミックに対応できるように準備し、地域支援病院として邁進して参ります。

（星野 史博）

緩和ケア科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

緩和ケア科部長、病棟医長	司城 博志
医 師	柴田 隆夫
医 師	工並 直子

2. 臨床実績

昨年 1 年間の「緩和ケア病棟」の入院数は 212 名（男性 105 名、女性 107 名）、入院時の年齢は 45 歳から 98 歳で平均年齢は 77.9 歳でした。悪性腫瘍の種類は例年とほぼ同じく、肺癌、胃癌、膵癌などが主でした（表 1）。患者さんの地区別の入院状況でも例年と同様、福岡市西区、早良区、糸島市で全体の 88.7%を占めていました。これは 2012 年の 77%に比べて増加しており、「緩和ケア病棟」が患者さんやご家族の生活基盤がある地域に密着した施設であることを示しています。（表 2）。「緩和ケア外来」には、昨年度 104 名の患者さんを紹介していただきました。昨年度の緩和ケア病棟在宅復帰率は 17.0%でした。

表 1：ホスピス・緩和ケア病棟の入院患者の原疾患別分類

肺癌	49 例
食道・胃癌	20 例
大腸・直腸・肛門癌	26 例
肝・胆・膵癌	54 例
乳癌	12 例
その他（子宮癌、卵巣癌、頭頸部癌）	69 例

表 2：ホスピス・緩和ケア病棟の地域別入院状況

福岡市西区	53.5%
福岡市早良区	32.6%
糸島地区	2.6%
その他の福岡市	6.6%
その他	4.7%

3. 1 年間の活動と今後の展望

昨年度は、新型コロナウイルス感染症も 5 類対応となり、緩和ケア病棟での家族の面会、付き添い、患者さんの外出・外泊の制限が徐々に緩和されてゆきました。家族で過ごせる喜び、安心の表情を目の当たりにして、残り時間が限られた患者さんとその家族にとって、家族として日常の時間を普通に過ごすことが、かけがえのない大切なものであることを実感しました。病気が治らない困難な状況を生きている患者さんは、治らないということは仕方のないことだが、最期の時を迎えるときまで、毎日を安心して生きてゆきたい、自分なりに納得して、自分ができる最善を生きてゆきたいと真摯に希望されています。

このような患者さん、ご家族のニーズに応えるには、外来診療、訪問診療と入院診療が価値観を共有して協力体制が必要です。これからは、外来部門、訪問看護、訪問診療と緩和ケア病棟、一般病棟がシームレスに協力する診療体制を目指してゆきたいと思います。

今まで当院での緩和ケア診療（入院、外来）を始めるにあたって、複数回の来院が必要であ

ったり、患者さん、ご家族にとって不便とも感じられる点もありました、次年度からはこれらの改善に努め、今後も患者さんにご家族、近隣の医療機関の皆様方のご要望に親切にしっかり応えられるように努力してゆきたいと思います。

(司城 博志)

呼吸器内科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

呼吸器内科部長 有富 貴道
非常勤医師 串間 尚子（福岡大学筑紫病院 呼吸器内科）

2. 2023 年度呼吸器疾患（入院・外来）

疾患名	外来	入院	疾患名	外来	入院
COVID-19	497	58 例	腫瘍性肺疾患		18 例
かぜ症候群		7 例	肺がん（原発性・転移性）	127	18
かぜ（感冒）	490	0	縦隔腫瘍	7	0
上気道炎	669	0	肺線維化疾患		9 例
インフルエンザ	187	7	間質性肺炎	77	9
感染性疾患		226 例	サルコイドーシス	6	0
肺結核症（陳旧性を含む）	56	1	胸膜疾患		14 例
肺炎			胸膜炎		
細菌性・肺化膿性	50	35	結核性胸膜炎	1	0
（マイコプラズマを含む）	1	0	癌性胸膜炎	7	1
非細菌性	393	190	胸水	100	8
（誤嚥性を含む）	87	116	膿胸	2	0
閉塞性肺疾患		44 例	自発性気胸	19	5
気管支喘息	691	19	肺循環障害		0 例
慢性閉塞性肺疾患（COPD）	135	19	肺水腫	4	0
慢性気管支炎（非閉塞性）	321	6	換気異常		3 例
拡張、嚢胞性肺疾患		4 例	睡眠時無呼吸症候群	104	3
気管支拡張症	67	2	睡眠時呼吸障害	0	0
無気肺・嚢胞など	37	2	過換気症候群	7	0
合計			383 例		

3. 1 年間の活動と今後の展望

【診療科案内】

呼吸器内科

外来診療は呼吸器内科の専門外来診療は月、火、水曜日の午前中、更に木曜日、金曜日午後には有富が担当（土曜日第 1、第 3 午前中）、また、2024 年度からは福岡大学病院、井上賢一先生にて木曜日午前中に呼吸器疾患に関して専門に診断治療を行っています。睡眠時無呼吸症候群については診断と治療特に CPAP（シーパップ：持続陽圧呼吸療法）導入患者の適応基準のための入院検査や装着患者の日常管理を特に水曜日に行っています。新患も各診療時間に合わせて相談や診療・治療にあたっています。他に職員検診や来院される健康診断の胸部 X 線のチェックを行い健康管理の一部を担っています。最近当院に精密検査に来られる方も増えてきています。特に肺癌の診断は重要な項目で健診にて精密検査を当院で済ませ、早めに治療できたと患者さんに感謝されています。

2023 年度の外来・入院患者さんの状況

今年も COVID-19 はほぼ横ばいにて、減少や軽症化しています。それでも外来は 1 日 1 人半程度、入院はほぼ毎週 1 人の換算になります。しかし患者数はまだ減ってなく今後も続く

と思われます。予防接種も毎年必要になって来るでしょう。

2023 年度の外来・入院患者数を表でみると、患者数が若干増加しています。発熱を主訴にコロナを心配され受診し大抵は上気道炎が今年も変わらず増えています。抗生物質や咳止めの品薄で処方できないことが多いのが実情です。専門医の指摘のようにコロナ減少傾向で外出も増えインフルエンザも今回は増えてきています。今後もコロナ感染は医療費の有料化で医療機関に受診せず蔓延し、増えることも懸念され、まだまだマスク着用は必要な様です。

呼吸器疾患入院患者数については、肺炎患者数は前年とほとんど変わりませんが、高齢者や基礎疾患の患者さんが多いのが当院の特徴で、肺炎の増悪や施設からの感染症状の増悪が誤嚥性の増加となったもので、さらにコロナ感染症等の 2 次感染が多いのが特徴でした。肺結核症について活動性患者はほぼなく、陈旧性かこれに伴う気管支拡張症や呼吸不全が主体です。むしろ非結核性抗酸菌症が外来で多く、排菌がつづくようなら治療も考慮していますが、治療期間が長くかかり、また、改善率が悪い疾患です。しかし、最近吸入による治療も導入され効果を上げてきているようです。間質性疾患の急性期は生命に影響するので高次医療機関に紹介しますが、高齢になると紹介も救命も難しくなり、不幸な転機を取ることも多い疾患でした。肺癌は診断を主に行い高次医療での集約的治療を期待しています。そこでも積極的治療は行われないことも多く、当院は終末期の治療継続も福大呼吸器科とも話し合っています。さらに緩和ケアを利用される方が他院からも紹介が多いようです。

【方向性と展望】

呼吸器疾患も新しい治療法が続々出ていますが、福岡大学院からも定期的に医社の派遣をいただいております、互いに応力して新しい治療を取り入れていきたいと思います。また、前述したように、睡眠時無呼吸症候群の診断・治療も幅を広げて取組んでいきたいと思っています。

(有富 貴道)

消化器内科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

消化器内科部長 小山 洋一

常勤医師 司城 博志

非常勤医師 4 名（福岡大学病院 消化器内科 3 名 山王病院 消化器内科 1 名）

2. 臨床実績

2023 年度消化器内科実績

【肝疾患】

C 型肝炎に対するインターフェロンフリー療法 約 5 例

B 型肝炎に対する核酸アナログ製剤 約 12 例

【内視鏡】

上部消化管内視鏡検査 812 例

下部消化管内視鏡検査 212 例

内視鏡的止血術 2 例

内視鏡的大腸ポリープ切除術 22 例

内視鏡的胃瘻造設術 2 例

内視鏡的胃物除去 2 例

計 1024 例

3. 1 年間の活動と今後の展望

消化器内科は 2 人の常勤医師と 4 名の非常勤医師で、消化器疾患全般（消化管、肝、胆、膵）の診断・治療に全力をあげて取り組んでいます。

消化管は食道・胃・大腸の癌を X 線・内視鏡で診断し、ポリープや早期がんは内視鏡的切除を行っています。消化管出血に対する緊急内視鏡的止血術も施行しています。なお、平成 21 年に受けた日本消化器内視鏡学会関連施設の認定は、以後も継続して更新しております。また最近は、近隣の病院や施設からのご依頼による内視鏡的胃瘻造設術や胃瘻チューブの交換も行っております。

肝臓疾患は平成 21 年に肝疾患治療専門医療機関の認定を獲得し、平成 23 年より日本肝臓学会関連施設の認定も受けました。C 型慢性肝炎に対してのインターフェロンフリー療法、B 型肝炎に対するインターフェロン療法や核酸アナログ製剤投与、自己免疫性肝炎や原発性胆汁性肝硬変に対しての免疫療法、原因不明の肝障害に対しての肝生検などを肝臓専門医が行っています。非代償性肝硬変症の難治性腹水に対し、腹水濃縮濾過再静注法（CART）も積極的に行い、患者様の ADL 改善に努めています。肝細胞がんは、腹部超音波検査・CT で診断し、早期肝細胞がんには、ラジオ波焼灼術も施行可能です。食道静脈瘤に対しては、内視鏡的結紮術と硬化療法を行い、緊急吐血症例にも対応しています。また、現在 3 名の肝炎コーディネーターにより、肝疾患患者様への積極的な関与と管理を行っています。

胆・膵分野は画像診断で、がんの早期発見、閉塞性黄疸に対する経十二指腸的胆管ドレ

ナージ術、胆管内の結石除去など、近隣の外科病院と連携して治療を行っています。

進行消化器がんでは手術治療が不可能な症例も、抗がん剤治療を行い、更に進行した症例では緩和ケア病棟での加療を行い、包括的な医療を提供出来るように努力しています。

(小山 洋一)

整形外科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

整形外科部長 蒲原 光義
整形外科副部長 白井 佑
非常勤医師 福岡大学整形外科より 1 名

2. 臨床実績

2023 年度 整形外科患者数（延べ数）		
	外来治療人数	入院治療人数
4 月	313	2
5 月	357	8
6 月	442	7
7 月	463	9
8 月	504	10
9 月	468	9
10 月	472	10
11 月	483	5
12 月	457	11
1 月	435	4
2 月	428	5
3 月	478	10
合 計	5300	90

3. 1 年間の活動と今後の展望

2023 年度は赴任初年度ということもあり、「毎日外来の先生が変わる」「あなたは何曜日にいるの？」などのお言葉を外来で頂戴しましたが、後半からは徐々に認知していただき、近隣にお住まいの方や登録医の先生方、他院外来、入院併設・介護施設などからも新規の方をご紹介いただけるようになり始めています。

団塊の世代が後期高齢者に差し掛かる今、内科疾患に加え運動器疾患の不具合を有する方は数多く、それらを総合的に網羅できる総合病院として地域に根差していることを実感しています。

当院では主に骨格の変形に伴う変性疾患、骨粗鬆症などの慢性期疾患を診療の軸にしており院内設備も単純 X 線撮影だけではなく CT・MRI 検査も早期に撮影可能、骨密度もガイドラインで推奨されている DXA 法での検査が可能であり診断の一助となっています。

また診察時に内科的な体の不調の特徴を訴えられることも多く、これらに関しては内科の各科の先生方のご協力を仰げる体制にあり、患者さんの安心につながっていると思います。

福岡大学病院、白十字病院をはじめ周囲の高度医療施設のご協力をいただき当院で対応困難な症例はご紹介させていただいています。

ばね指などの腱鞘切開や大腿骨近位部骨折をはじめとした外傷にもできる限り対応させていただきます。リハビリテーション部もスタッフ数・専門性・設備が充実しており、デイケアや訪問診療もあり亜急性期から慢性期、自宅での生活まで幅広くサポート体制が整っていますので、お困りの際にはご相談いただけると幸いです。

(白井 佑)

在宅診療部 在宅診療科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

在宅診療科部長	古田 興之介
在宅療養部長	田代 博史
在宅診療兼任医師	司城 博志
当院併設サ高住「かりん」担当医師	工並 直子
在宅コーディネーター 4 名（看護師 3 名・在宅介護事務 1 名）	

2. 臨床実績

看取りの年次推移

	2021 年度	2022 年度	2023 年度
登録総数	176 名 (男 75 名・女 101 名)	216 名 (男 95 名・女 121 名)	229 名 (男 92 名・女 137 名)
死亡総数	45 名	81 名	73 名
病院死亡	11 名 難病：2 名 癌：5 名 他：4 名	24 名 難病：3 名 癌：13 名 他：8 名	22 名 難病：8 名 癌：11 名 他：3 名
在宅死亡	34 名 難病：2 名 癌：17 名 他：15 名	57 名 難病：13 名 癌：25 名 他：19 名	51 名 難病：9 名 癌：28 名 他：14 名

3. 1 年間の活動と今後の展望

2023 年度の診療科構成は、訪問診療常勤医が 2 名、訪問診療兼任医師が 1 名、サ高住「かりん」担当医 1 名、在宅コーディネーター 4 名（看護師 3 名、介護事務 1 名）でした。本年度の在宅診療科は常勤医師 2 名体制で、1 年間稼働することができました。

2023 年度において 1 年間の患者登録延べ総数は 229 名、その中で死亡総数は 73 名（在宅での看取りが 51 名で 69.8%、病院内での看取りが 22 名で 30.2%）でした。患者の登録延べ総数は前年度より 13 名増加しています。しかし在宅看取り数に関しては、前年度と比較し 6 名の減少となっています。全体的には昨年度と比較し著変なく在宅診療を行えている結果となっています。

在宅での看取り 51 名の中で、高齢者施設での看取りは 23 名（2022 年度は 27 名）でした。その内訳は当院併設のサ高住「かりん」が 11 名（2022 年度は 14 名）、特別養護老人ホーム「マナハウス」が 4 名（2022 年度は 4 名）、住宅型有料老人ホーム「メディケア癒やし今宿」が 2 名（2022 年度は 0 名）、「マナハウス 2 番館・マイネスハウス福重・ナーシングホームすせんじ・鳳凰館・セラピア下山門・杜の樹」が各々 1 名ずつでした。当院では近隣の高齢者施設を支援することも重要な役割と考えていますが、前年度と比較し施設での看取り数は 27 名から 23 名とやや減少となりました。

また当科では定期的に医学部学生の在宅診療実習を受け入れてきていますが、2023 年度も九州大学医学部学生および福岡大学医学部学生の在宅診療実習を行うことができました。2024 年度も引き続き医学部学生の在宅診療実習は受け入れていく予定です。

在宅診療科としての基本的な方針（神経難病や末期癌の緩和ケアなど当院に特化した病院機能を支える・近隣の高齢者施設を支援する）は本年度も変わることなく、今後も病院と連携して行う在宅医療は継続していきたいと考えています。

（田代 博史）

健康増進・糖尿病センター

1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

医師 吉田亮子（糖尿病学会認定研修指導医、日本内科学会認定内科医）
 医師 柳田育美（糖尿病学会認定研修指導医、日本内科学会認定内科医）
 医師 矢野沙織（糖尿病学会認定専門医、日本内科学会認定内科医）
 医師 宮地康高（糖尿病学会認定専門医、日本内科学会総合内科専門医）
 糖尿病療養指導士 15名、 看護師 8名、 栄養士 2名、 薬剤師 1名
 臨床検査技師 3名、 理学療法士 1名

2. 臨床実績

外来および入院患者内訳

外来 延べ総数	6306 名	
実人数	1178 名	
糖尿病	722 名	
生活習慣病・一般内科	456 名	*1
入院 総数	159 名	
糖尿病	115 名	*2
その他	44 名	*3
入院（院内他科依頼）総数	102 名 + α	*4

- *1 高血圧、脂質異常症、動脈硬化性疾患、内分泌疾患、総合外来、救急外来を含む
- *2 糖尿病教育入院教室参加数 34 名（109 回開催）
（新型コロナウイルス感染症のため糖尿病教室制限の時期あり）
他疾患で入院した糖尿病患者を含む
- *3 他疾患新患外来から入院した呼吸器、消化器、尿路系の急性期疾患
障害者病棟や緩和ケア病棟関連の疾患
- *4 入院中併診で血糖コントロールを行った患者
（眼科短期入院中の糖尿病患者を含まない）

3. 1 年間の活動

本年度は福岡大学、九州大学からの応援を頂き、多職種（看護師・栄養士・薬剤師・検査技師・放射線技師、リハビリテーション科、事務部門、メディカルソーシャルワーカー）と連携をとり、また多くの診療科にサポートの元、診療に携わってまいりました。

ここ数年は高齢化社会の中での糖尿病診療体制やコロナ禍での医療現場の変化、また働き方改革に伴う業務改善が急務となりました。何より患者さん一人一人に寄り添った診療を継続していくことを前提に、スタッフが健全に働ける環境を整えるためには、業務改善に伴う全ての職種への影響を考え、理解を得ながら行っていく必要となります。各部署とコミュニケーションをとりながら下記内容に取り組めたことに感謝しながら、これらを今後の診療につなげていけたらと思っております。

(1) 看護部

スムーズな連携、ヒヤリハット防止、安全な医療へ繋げるため業務時間内に下記項目について勉強会開催

- 1) 糖尿病教育入院の流れ
- 2) 低血糖
- 3) インスリン、注射製剤
- 4) 血糖日内変動、体重日記
- 5) 自己注射・自己血糖測定に関する診療報酬点数
- 6) 病棟での糖尿病治療、血糖を考える
- 7) 高血糖の緊急症
- 8) 糖尿病治療の目標値
- 9) 食事、注射のカロリー
- 10) 患者さんからの薬についての質問

(2) 薬剤科、院外薬局

インスリンのバイオシミラー・カートリッジ製剤の積極的導入
自己注射指導の協力依頼、医薬品の製造・供給停止や出荷制限への対応

(3) 事務部門、医師事務

診療報酬制度の理解と情報共有化、外来における医師・看護師業務見直し
診療前準備による外来待ち時間の改善、レセプト業務削減

(4) 検査科、放射線科

自己血糖測定器保守点検、HbA1cの精度管理、糖尿病合併症精査推進

(5) リハビリテーション科

サルコペニア・フレイル・認知/生活機能の早期把握と日常生活の支援
退院後の運動継続支援

(6) 栄養管理科

患者さん、家族含めた栄養指導の個別対応、糖尿病教室の簡略化
糖尿病療養指導士・糖尿病診療スタッフへの情報共有・伝達

(7) 地域連携、メディカルソーシャルワーカー

病院間の連携、患者さん・家族を尊重した生活背景の把握
院内院外共に多職種と連携した介護支援

(8) その他

糖尿病教室の見直し、開催時間の工夫、テキストの簡略化

(吉田 亮子)

腎臓内科・血液浄化療法センター

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

血液浄化療法センター長・腎臓内科部長	村田 敏晃
看護師長	1 名
看護師	8 名
臨床工学技士	6 名
ケアスタッフ	1 名
キーパー	1 名

2. 臨床実績

年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
外来	1392	3146	3279	4592	5543	6344	6740	7035	8807	6700	6430	6215	6214	6304
入院	197	532	1007	1000	684	793	815	912	1031	1173	1308	1342	1492	1686
延べ人数	1589	3678	4286	5592	6227	7137	7555	7947	7838	7873	7738	7557	7706	7990

図)2010年7月5日から2023年3月31日までの透析患者延べ人数の推移

3. 1 年間の活動

(1) 腎臓内科：

外来で継続加療中の慢性腎臓病（CKD）患者 95 名（昨年 93）：ステージ G3 以上が 62（昨年 56）名。G3a:24 名（昨年 25）：（男性 11<昨年 11>、女性 13<昨年 14>）、G3b:21 名（昨年 17）：（男性 11<昨年 7>、女性 10<昨年 10>）、G4:8 名（昨年 6）：（男性 3<昨年 1>、女性 5<昨年 5>）、G5:9 名（昨年 8）：（男性 5<昨年 5>、女性 4<昨年 3>）であった。

（＊糖尿病・内分泌内科、循環器など他科併診も含む）

尚、CKD 患者に対しては、腎代替療法専門指導士 1 名、慢性腎臓病療養指導看護師 1 名が必要に応じて適切な指導を行っている。

(2) 血液浄化療法センター：

当センターでは、「安全で質の高い透析療法・看護の提供」に努め、木の素材を生かしたぬくもりがある床と大きな窓のあるフロアで、患者さんの安全で快適な透析療法を提供することを目指している。透析のシステムとして、逆浸透水处理装置、エンドトキシン捕捉フィルタ、透析溶解装置 DAD などを使用し透析液清浄化を行い、超純粋透析液（エンドトキシン濃度 0.001EU/mL 未満かつ透析液細菌数 0.1cfu/mL 未満）を作製し、配管の繋ぎ目がない PVDF 配管を使用することによって患者さんには非常に清浄化された透析液を供給している。装置は全て日機装株式会社性で、全 29 台にはブラッドボリューム計が装備されている。多人数用透析装置（DCS-200S1）23 台と個人用透析装置（DBB-200S1）6 台を設置し、血液透析（HD）、血液濾過（HF）、限外濾過（ECUM）、血液濾過透析（On-line、IHDF）、AFB への対応が可能。また、必要に応じて血漿交換療法（CART、LDL-A、DFPP、単純血漿交換）なども行っている。

体重測定の間違いなどが起こらないように透析通信システム Future Net II（日機装社）を使用している。治療に際しては、血液浄化関連専門医（透析専門医・透析指導医・血漿交換専門医資格あり）が、看護師・臨床工学技士（血液浄化認定臨床工学技士資格あり）と透析医療を行い、透析中の急変などに備えています。

- 1) 2024 年 3 月末時点で、スタッフは師長 1 人・看護師 9 人、臨床工学技士 6 人、ケアスタッフ 1 人、キーパー 1 人。
- 2) 2023 年度の延べ患者数は 7,990 人（2022 年度 7,706）。内外来 6,304 人（2022 年 6,214）入院 1,686 人（2022 年度 1,492）で、2022 年度に比べて外来 90 人増（2022 年度は前年より人減）、入院患者 194 人増（2022 度は前年より 150 人増）で、延べ人数としては 284 人増加（2022 年度より 149 人増）し、2022 年度より増加に転じた（図）。
- 3) 2023 年度、新規患者は 4 人。内当院での新規導入患者は 4 人（2022 年度 4 名）。
- 4) 2023 年 3 月末時点で、当院透析患者数は 49 人（2022 年度 49）、内 39 人（2022 年度 39）は外来透析、10 人（2022 年度 10）は入院中患者。
- 5) 入院患者の入院科は同一患者再入院も含め、
 - (1) 腎臓内科 58 人<2022 年度 24>
<紹介元>：当院外来 35（新規導入 2）、松口胃腸科外科医院 9、三光クリニック 4、福岡大学病院 3（救命救急センター 1、形成外科 1、腎臓・膠原病内科 1）、宮内内科循環器科 3、済生会福岡総合病院整形外科 1、白十字病院外科 1、西福岡病院 1、九州医療センター 1
 - (2) 循環器内科 16 人<2022 年度 11>
<紹介元>：当院外来 8（腎臓 5、整形外科 1）：新規導入 2、福岡大学病院 3（循環器内科 1、形成外科 1、腎臓・膠原病内科 1）、三光クリニック 2、福岡記念病院 1、白十字病院循環器内科 1、福岡赤十字病院脳神経外科 1
 - (3) 糖尿病・内分泌内科 8 人<2022 年度 8 人>
<紹介元>：当院外来 3、院内 2（眼科 1、整形外科 1）、済生会福岡総合内科 1、松口胃腸科外科医院 1、九州中央病院 1、
 - (4) 眼科 4 人<2022 年度 4 人>
<紹介元>：三愛クリニック 2、いふく内科 1、当院糖尿病・内分泌内科 1。
 - (5) 整形外科 3 人
<紹介元>：浜の町病院整形外科 1、福岡赤十字病院整形外科 1、九州医療センター整形・リウマチ科 1
 - (6) 神経内科 1 人<2022 年度 5 人>
<紹介元>：福岡大学病院脳神経外科
 - (7) 臨時透析 1 人：熊本県菊池郡菊陽町の仁誠会クリニック大津より
- 6) 2023 年度の死亡患者は 6（2022 年度 11）人。
他院よりの紹介患者 3（2022 年度 4）人、当院外来・入院中を含め患者 3 人
- 7) 2023 年度、透析患者の新型コロナ感染は 14 名：外来患者 10 名、入院中患者 2 名（院内感染）、2 名はコロナ感染で入院（1 名当院外来透析患者、1 名は他院外来透析患者）、何れの患者も当院で空間的・時間的隔離透析を施行し治療。
インフルエンザ感染 2 名、疥癬 1 名（入院中患者）。
スタッフ感染は 12 名で、家族より感染。
- 8) 血漿交換療法は、腹水濃縮再静注（CART）：延べ 25 回（2022 年度 5）で、同一患者。免

疫吸着（神経疾患：延べ 19 回＜2022 年度 17＞）：同一患者で入院加療。レオカーナ延べ 31 回（患者 2 名）。

9）シャント関連：新規作製 8 人（2022 年度 12）、PTA20 人（2022 年度 11）：当院外来患者 15 人（同一患者あり、1 名には DCB 1 回使用）で、他院より紹介 5 人（同一患者あり）。

紹介元病院は、福岡大学病院（腎臓・膠原病内科・循環器内科・心臓血管外科・形成外科・整形外科、脳神経外科）、白十字病院（外科・循環器内科）、福岡記念病院、九州医療センター、三光クリニック、松口胃腸科外科医院、三愛クリニック、いふく内科、九州中央病院、福岡赤十字病院脳神経外科、済生会福岡総合病院、浜の町病院整形外科、福岡赤十字病院（順不同）

（村田 敏晃）

眼科・アイセンター

1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

副院長・アイセンター長	野下 純世
部長	ファン ジェーン
医師	高 良太
看護師	2名（外来日は応援あり）
視能訓練士	3名
眼科クラーク	1名
医師事務	1名（外来日は2名）

2. 臨床実績

2023年度 眼科手術症例内訳

	外来	入院	合計
水晶体再建術（白内障手術）	18	646	664
硝子体手術	0	72	72
網膜復位術	0	0	0
緑内障手術	0	12	12
外眼部手術	18	39	57
硝子体注射（※1）	214	13	227
その他	189	59	248
計			

硝子体注射（※1）	外来	入院
テノン氏嚢内注射	8	0
硝子体内注射	206	13

3. 1年間の活動と今後の展望

【臨床実績と1年間の活動】

2023年はファン医師と新たに高良太医師を迎え、新たな布陣で出発いたしました。新型コロナウイルスの感染対策に留意しながらも、ほぼ通常通りの手術を行いました。手術につきましては、前年と同様、硝子体手術、白内障手術、各種緑内障手術、外眼部の手術（眼瞼下垂、睫毛内反）、翼状片、結膜弛緩症、抗 VEGF 治療など、多種多様な治療に対応しました。特に緑内障手術に関しては、低侵襲緑内障手術（MIGS）も導入し、白内障との同時手術を行うことで、より早く緑内障治療にアプローチできるようになりました。

外来は、火、木（午前、午後）、土（午前）、手術は月、水、金（午前、午後）で行っております。火、木、土の外来は、待ち時間軽減のため予約制で行っており、看護師や視能訓練士、医師事務の配置を手厚くすることで、患者様の待ち時間短縮を図り、患者満足度の向上を目指しております。外来日は、もちろん予約外でも診察は可能なのですが、予約の患者様が多い中、お待たせしてしまったという事例も起こっておりますので、初診の患者様でも、ご遠慮なく予約のお電話をいただけますと、空いている時間をご案内できますので、よろし

くお願い申し上げます。

また、当院では、外来から入院、手術に至るまで、同じスタッフが対応することで、顔が見える看護を行うことができ、患者様からも安心したという声をいただいております。全身状態が悪い方や認知症の方にも、できる限りの対応をしております。医療現場の働き方改革を見据え、患者様に安心して治療を受けてもらえるよう、これからも、さまざまな工夫をおこなっていきたいと思います。

(野下 純世)

薬剤科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

薬剤師 6 名（パート 2 名含む）
クラーク 2 名（1 名：休職）

2. 臨床実績

抗がん剤無菌調製業務 277 件/年
後発医薬品使用体制加算Ⅰ（年間通して）

3. 1 年間の活動と今後の展望

2023 年度の調剤処方箋枚数は月平均約 2100 枚、注射処方箋は月平均約 4100 枚でした。入院患者さんの鑑別件数は年々増加傾向にあり、月平均約 195 件、年間 2350 件、薬剤科ではできる限り患者さんの持参薬を使用することで、患者様の自己負担の軽減や医療費の削減に取り組んでいます。

薬剤科が主体となる委員会においては、薬事審議会を通して採用薬の期限切れ情報を医師に周知し、デットストックの見直しを行ってきました。また高額な冷所医薬品の在庫管理や品質管理業務の効率化を図る上で高額医薬品管理システム「キュービックス」を導入し、廃棄コスト削減の取り組みを行っています。

後発医薬品の取り組みにおいては、前年度と同様、薬剤科全体で取り組みを行い、今年度はバイオ後続品の導入にも力を入れてきました。その結果、薬剤納入規制が継続する中で年間を通して後発医薬品調剤体制加算Ⅰを算定する事ができました。

今年度は薬剤師の退職、事務員の産休もあり、下半期からは薬剤管理指導業務も縮小せざる負えない状況となってしまいました。その中でも、カンファレンスや認知症ケアラウンド、DM 教室にも積極的に参加し、チーム医療にも少なからず貢献することができました。

次年度は、4 月から新入職も加わり、少しずつ病棟業務や入退院支援などチーム医療に貢献できるようスタッフ全員で取り組んでいきたいと考えています。

（貝田 裕彰）

臨床工学科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

臨床工学技士 6 名

2. 臨床実績

医療機器管理台数	163 台
定期点検件数	532 件
日常点検件数	15,638 件

3. 1 年間の活動と今後の展望

【血液浄化療法業務】

血液浄化療法センターには多人数用透析装置 23 台、個人用透析装置 6 台があり、月平均 55 名の患者様の治療を行っています。透析通信システムや排水除害装置を含む透析に関連する全ての装置の保守管理に臨床工学技士（CE）は携わっています。特に透析用監視装置については、メーカー主催のメンテナンス講習を受講し、洗浄・消毒・点検・部品交換・調整に至るまで全てを当科で行っています。それらを通して、日頃より技術の定着と向上に取り組み、90%以上の装置トラブルを科内で対処し、治療中の装置トラブル防止にも寄与しています。また多様な病態やニーズに対応するため、特殊血液浄化療法にも取り組んでおり、今年度は腹水濾過濃縮再静注法 25 例、血漿吸着療法 19 例、レオカーナ 31 例を施行しました。その他、LDL 吸着や持続血液透析濾過にも対応することができます。

血液透析療法によって効率良く毒素や水分の除去をおこなうためには、バスキュラーアクセス（以下 VA）は常に良い状態に保つことが重要です。当科では、これまで以上に VA 管理に力を入れるため、超音波検査による血流機能評価や形態評価を今年度より開始しました。患者様やスタッフに正確な情報をお伝えすることができるよう、休日を利用してハンズオンセミナーや研修に参加し、技術の習得に努めました。1 年を通してこれらに取り組んだことによって、スタッフ間で血管の状態を共有できるようになり、穿刺トラブルの防止や治療のタイミングの提案を行えるようになりました。

【医療機器管理業務】

院内で使用する人工呼吸器・シリンジポンプ・輸液ポンプなど 100 台以上の医療機器を安全に使用するため、中央管理化し保守管理・点検・修理を行っています。また、毎日、病棟・外来の医療機器巡回を行い、適切に使用できているか、不具合はみられないか等を点検しています。

手術室では、手術中の装置トラブルを未然に防ぎ、円滑に手術が進行できるように麻酔器や生体監視モニター、眼科手術装置、无影灯などの点検をおこなっています。

その他、各部署からの医療機器に関する相談、看護師やその他の職種を対象に医療機器研修会なども行っており、2023 年度は 24 件の研修会を実施しました。

今後も、専門分野の知識向上を図り、安全な医療機器の提供に努め、チーム医療の一員として地域医療に貢献出来るよう努力してまいります。

（藤本 菜摘）

臨床検査科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

検体検査部門 臨床検査技師 3 名
生理検査部門 臨床検査技師 3 名

2. 臨床実績

【検体検査】

生化学的検査	生化学	337,069
	その他	1,943
血液学的検査	血算	20,622
	凝固	5,930
	HbA1c	7,495
	その他	11,437
尿・糞便等検査	尿定性	9,383
	尿沈査	2,867
	便潜血	2,159
	その他	1,192
免疫学的検査	CRP	10,476
	感染免疫	8,827
	血液型	166
	不規則抗体	229
	クロスマッチ	295
内分泌検査	BNP	566
遺伝子検査		490
その他		71

【生理検査】

循環機能検査	心電図	6,022
	ホルター心電図	187
	その他	426
呼吸機能検査	肺活量等	212
超音波検査	胸腹部	1,153
	心臓	931
	頸動脈	288
	下肢血管	108
	甲状腺等	96
脳波検査等	脳波	32
	SAS 検査	25
神経・筋検査	誘発筋電図	38
その他		2,136

<新規購入装置>

デンシトメトリー分析装置（Immuno Reader II）2 台

<更新装置>

電解質測定装置（STAX-6）

睡眠評価簡易装置（Apno Monitor 8）

3. 1 年間の活動と今後の展望

2023 年 5 月初旬からの新型コロナウイルス 5 類感染症移行に伴い、インフルエンザ検査も同時に行える定性検査装置（Immuno Reader II）を新たに 2 台導入し検査体制の見直しを行いました。

検査体制の見直しにより、検査時間短縮や検査費用の自己負担軽減などが図れました。

新規検査項目として、BNP（脳性ナトリウム利尿ペプチド）測定・ヘリコバクターピロリ菌検出検査（遺伝子検査）を導入しました。

BNP 測定は外部委託検査のため結果は後日報告でしたが、心不全や心肥大などの心臓病の早期発見を迅速に行えるように院内検査へ変更しました。

ヘリコバクターピロリ菌検出検査は、内視鏡検査時の胃液（廃液）を使用してヘリコバクターピロリ菌を検出する高感度の遺伝子診断検査です。

胃の組織を生検しピロリ菌の有無を調べる検査と比べ、体への侵襲は少なく出血するリスクがありません。

またピロリ菌感染の有無と同時に、一次除菌療法の際に使用する抗生剤（クラリスロマイシン）の感受性も調べられ、クラリスロマイシン耐性と分れば二次除菌を最初から治療に使えるメリットがあります。

睡眠時無呼吸症候群の検査については、簡易装置の更新と一泊入院で行っていたPSG（終夜睡眠ポリソムノグラフィー）検査を自宅で検査可能な在宅型PSG検査に変更しました。在宅型PSG検査は、いつもと同じ環境で検査ができ入院に対する負担やストレス軽減が図れるメリットがありますが、就寝前に自分で検査機器を装着しなければならないデメリットもあります。

検査を行う際には、患者さんが装着に不安を抱かないよう装着説明を丁寧に行い、自宅のパソコンやスマホで確認できる装着の動画サイトも案内しています。

実際に使用した患者さんの感想も、特に問題なく満足頂いているようです。

ここ数年は新型コロナウイルス感染症対策や検査に迫られる日々でしたが、今後も状況に応じた感染対策を継続しつつ「正確かつ迅速な検査結果報告」をモットーに、医療を通じて地域社会へ貢献できるようスタッフ一同努めて参ります。

（小野 一充）

栄養管理科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

管理栄養士 2 名 栄養士 1 名

〈委託〉 管理栄養士 1 名 栄養士 3 名 調理師 1 名

〈委託パート〉 管理栄養士 2 名(実働 5H) 仕込み 4 名(実働 5H)
朝昼洗浄 5 名(実働 5.5H) 夕洗浄 3 名(実働 3H)
調理補助 4 名(実働 7.75H、5.75H、4H)



土用の丑の日の献立

2. 臨床実績

月	食事指導 件数		糖尿病教室 実施状況		栄養管理 計画書 作成件数
	入院 件数	外来 件数	実施 回数	延べ 人数	
4	12	18	17	31	370
5	5	8	4	8	233
6	9	9	17	30	354
7	10	8	17	23	336
8	4	12	13	16	360
9	3	6	0	0	332
10	2	12	9	19	339
11	1	8	1	1	334
12	5	8	6	6	320
1	10	14	6	14	357
2	8	10	3	3	330
3	11	9	16	34	350

一般食	食数	特別食	食数
常食（※緩和含）	108.9	エネコン食	96.7
全粥食	56.6	術後食	0.1
3・5分粥食	3.9	易消化食	0.5
流動食	1.9	低プリン食	0
嚥下訓練食	58.9	低残渣食	1.8
オーダー食	4.1	貧血食	0
延食	1.2	大腸検査食	0
ヨード制限食	0	脂質制限食	1.6
短期ドック食	0	蛋白制限食	16.4
濃厚流動食	25.7		
一般食小計	261.3	特別食小計	117.0
1 日平均食出し数（合計） 378.3 食			

3. 1 年間の活動と今後の展望

昨年度は、給食業務内容の見直しを行ったことで、きめ細かな食事の対応が非常に難しくなりましたが、その中でも出来る範囲を提案して栄養管理業務に取り組みました。

患者の高齢化も進み、患者背景も多様化している中で栄養食事指導は非常に難しく、家族などの理解や独居の方へのサポート体制を考慮した指導を行っています。コロナ前後での外来指導の疾病別に見ると糖尿病が 6 割占めています。70 歳以上の 5 人に 1 人は糖尿病が疑われる現状で血糖のコントロールは不可欠です。腎臓病指導も増えて、疾病の防止策と、特に低栄養の改善が重要になっています。診療報酬改定においては、まさに“食べること”を重要視した改定であり、治療効果を上げるためにも食事＝栄養が大事であると再認識されています。リハ・栄養・口腔加算をはじめ、外来透析予防指導など早急に対応して、患者様一人一人に「適切な栄養管理」を行い早期回復及び QOL の向上に努めます。

（田代 由美）

リハビリテーション科

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

理学療法士（PT）	22 名
作業療法士（OT）	14 名
言語聴覚士（ST）	6 名
ケアスタッフ（CS）	5 名

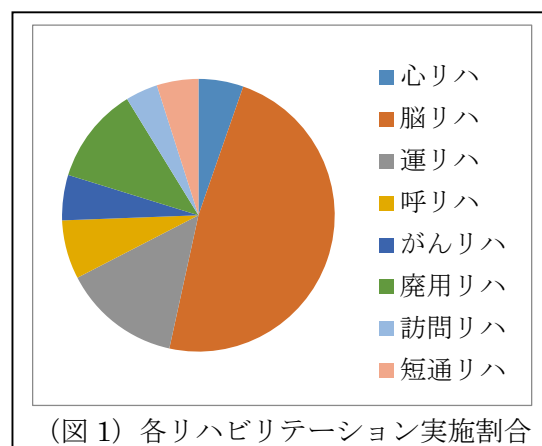
2. 臨床実績

リハビリテーション（以下リハビリ）科の診療内容は、医療保険下での各疾患別リハビリ（心大血管、脳血管、運動器、呼吸器、がん患者、廃用症候群）と介護保険の訪問リハビリ、短時間通所リハビリを実施しています。

2023 年度の各リハビリの実施単位数および件数は、以下（表 1、図 1）の通りとなっています。

（表 1）リハビリテーション実施件数

リハビリテーション種別	単位数・件数
心大血管リハビリテーション	6930 単位
脳血管リハビリテーション	62430 単位
運動器リハビリテーション	18141 単位
呼吸器リハビリテーション	9059 単位
がん患者リハビリテーション	6999 単位
廃用症候群リハビリテーション	14878 単位
訪問リハビリテーション	4973 件
短時間通所リハビリテーション	6404 件



3. 1 年間の活動と今後の展望

リハビリ科は、2023 年度の目標を表 2 のように定め、取り組みました。各目標の成果として、入院患者様の日常生活活動能力（ADL）の改善率のデータ化、入院患者様の ADL 改善率 5%超、病棟会や病棟勉強会参加による連携向上、科内教育統括者の設置、能力開発カードの活用による人事考課の開始、チーム報告会の開催、介護リハビリ（短時間通所・訪問）利用件数 13%増、介護予防事業運営（利用者数 21 名）、医療・介護リハビリ修了者の参加の場の推進（当院関連地域運動教室移行：4 例）、リハ関連学会への演題発表参加 11 件、症例検討の質向上（症例報告評価制度導入）を達成しました。反面、ラダーの本格的運用開始には至っておりません。

(表 2)2023 年度リハビリテーション科目標

リハビリテーション科目標	具体的取り組み
1.リハビリテーション部門の充実	ADL 改善率の向上 入院支援の充実 他部署連携の充実
2.働きやすい職場創り	スタッフ教育システムの修正 能力開発カードの人事考課への活用 チーム報告会の開催
3.地域ニーズに応えるリハビリテーション体制の整備	訪問、短時間通所リハビリ利用者の増加 予防を意識した地域貢献 リハビリ修了後のフォローアップ体制
4.質の高い人材育成システムの整備	学術的取り組みの推進 症例検討の充実 ラダーの本格的運用

2024 年度は診療報酬、介護保険制度、障害者福祉制度のトリプル改定があり、新制度への適応が求められます。それらに合わせたリハビリ科の目標は、前年度の 4 本柱は保持し、それぞれの具体的取り組みを修正しています。

「1. リハビリ部門の充実」としてリハビリ実施効果の向上を図るために、①入院後早期のリハビリの質、量の向上、②入院中の活動量の確保、③退院支援に向けた環境調整、在宅施設との連携の向上、④健康な在宅生活継続のための外来、介護リハの質の向上を挙げています。

「2. 働きやすい職場環境作り」としては、①業務周知の円滑化、②職種、チームの垣根を超えたスタッフコミュニケーションの向上、③目標思考的取り組みによるモチベーションの向上、④業務シェアによる効率化を挙げています。「3. 地域ニーズにこたえるリハビリ体制の整備」としては、①入院、外来、介護、地域のシームレス化、②地域貢献活動の推進、③予防のアウトカム化を挙げています。そして、「4. 質の高い人材育成システムの整備」として、①学術的取り組みの推進、②症例検討の充実、③スタッフ教育システムの向上を挙げています。

各目標の帰結先が、患者様、利用者様への還元、病院貢献に繋がることを意識して、取り組んでいきます。

(山口 良樹)

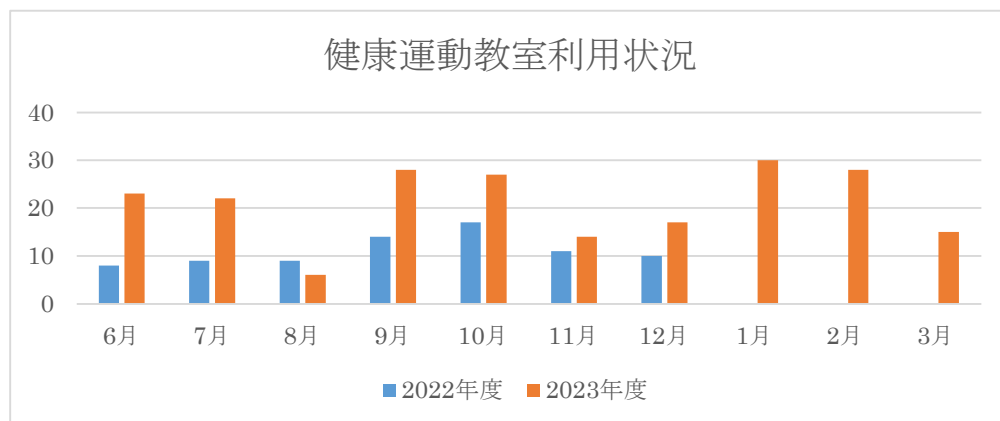
2023 年度 健康運動教室（壱岐南公民館）

担当スタッフ PT : 2 名





参加実績：参加者数月のべ平均 21 人（前年度 11.3 人）



近隣の公民館と連携し地域住民の方を対象として、2022 年度より健康運動教室（介護予防教室より名称変更）を開催しております。上記にありますように前年度の利用者より大幅増加となり、地域住民の方の健康増進の一助になったと考えています。運動内容に関しては地域住民の方がどなたでもご参加いただけるよう、運動初心者の方から日頃運動されている中級者、上級者向けの運動内容をレベル分けして実施しています。

2024 年度も引き続き、同様の形で運営していく予定としております。また、参加者の効果判定も行っており、参加者皆様のモチベーション向上も行っていきたいと考えています。

健康運動教室

日程：**5月23日～ 第2・4木曜 15時～16時**
（R7年3月まで）

対象：**先着18名**（※福岡市にお住まいの方）

運動内容：体力測定、音楽に合わせてエクササイズ、ストレッチ

場所：壱岐南公民館



村上華林堂病院 リハビリテーション科 塩田 宇田
連絡先：092-811-3331

放射線科

1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

放射線技師 4名 クラーク 1名

2. 臨床実績

2023年度業務実績（ ）内は前年度件数

一般撮影	10241 件 (8184)
骨密度測定	399 件 (326)
C T 撮影	3322 件 (2922)
M R I 撮影	992 件 (864)
透視検査	631 件 (622)

時間外対応

コール回数	151 回 (112)
撮影件数	339 件 (224)

2023年度 主な放射線関連機器

一般撮影装置
ポータブル撮影装置
移動式外科用イメージ装置
X線デジタル透視装置 (DSA)
全身用骨密度測定装置
マルチスライスC T (64 列)
オープンM R I (0.4 T)
C R 読取装置
P A C S (院内画像配信システム)
遠隔読影システム

3. 1年間の活動と今後の展望

今年度も日々感染対策を徹底しながらの業務でしたが、検査件数は前年度に比べ、全検査において増加しており、ようやくコロナ禍前の通常診療に戻ったように思われます。今年度は10月にポータブル撮影装置を更新し、病室での撮影を円滑に行うことができました。これにより患者様への身体的負担軽減を考慮した医療提供を継続していきたいと思います。

近年、放射線検査の医療被曝が問題となっておりますが、当院も医療放射線安全管理部会を発足し4年が経過しました。その間、被曝線量について定期的に見直しを行い管理しています。また、職員に対しても被曝に対する正しい知識を共有してもらうため、研修も実施しておりますので、どうぞ安心して検査を受けられて下さい。

年々、高度医療機器による画像診断は進歩を遂げ多様化しており、これら膨大な画像データは遠隔読影システムを通して放射線科医による読影を行い、主治医とのダブルチェック体制をとっています。

私達はこれに対し充実した画像を提供できるよう医師との定期的な画像カンファレンスを行い、日々知識の向上と技術の習得に努めています。

また24時間オンコール体制をとり時間外での救急医療も対応しています。

今後も徹底した感染対策を継続し、地域の方々・近隣の医療機関の皆様へ安心と満足のできる医療を提供していきたいと思います。

これからも思いやりをもって患者様に接するよう業務を実践し、少しでも地域医療に貢献できれば幸いです。

(久間 伸彦)

看護部

1 年間の活動と今後の展望

看護部の 2023 年度の目標

- ★患者さんが安心して地域で暮らせるよう、生活を重視したつなぐ看護の提供を行う
 - ★ひとり一人が、働き方改革・病院経営参画に取り組み、業務改善・業務の効率化に努める
 - ★育ち、育てる環境を作り離職防止に努める
- 年間目標を立案し活動、評価しました。

1. 財務の視点

病床稼働率は、全体で 89.7% で目標達成できました。新型コロナのクラスターが 3 回起きましたが、他病棟の入院や眼科の手術はストップすることなく対応し稼働率も保つことができました。2 階南病棟は、土、日の空床は眼科の退院日の調整もあり稼働率が低下するため、年間を通して眼科の予約状況をみながら内科及び整形外科の患者を調整したことも効果があったと思います。一般病棟の看護必要度、地域包括ケア病棟の在宅復帰率ともにクリアでき施設基準を維持出来ました。3 階、2 北病棟、MSW、RH とで週 1 回合同ミーティングを行い転棟調整を密にできるように努めています。

新型コロナが 5 類になり、感染対策に気が緩んだ面もありクラスターを発生させてしまいましたので再度、感染委員会を中心に指導を行い周知徹底しました。

2. 顧客の視点

外来は 5 年ぶりに待ち時間調査を行い、長時間待つ患者は少なかったのですが、定期的に待合室を巡回し声掛けを行い待ち時間の苦情を減らすことができました。

各病棟、苦情が 2～3 件ありましたが早期に対応することができました。金銭紛失の訴えが 4 件あり、セフティ box の使用や金銭管理の指導を行うことを継続しています。

退院後訪問に関しては 1～2 件しか実施できず、今後の課題としました。

3. 業務のプロセス

時間外平均 2 北病棟 6.2、2 南病棟 4.5、3 階病棟 5、4 階病棟 3.8、緩和ケア病棟 2.2 で目標をクリアできました。各病棟、リーダー業務での残業や入院患者対応や記録での残業が多い現状です。2 階南病棟の TQM 活動でリーダー業務の見直しをテーマとして取り組み、時間外業務の短縮に繋ぐことができましたので他病棟も参考にに取り組むこととしました。定刻前出勤に関して主任会で現状を把握し対策を検討中です。また、コロナクラスター時は部署間の応援を適宜行い業務の負担を軽減できるようにしました。

訪問看護へは訪問診療や外来から応援を継続しています。

指差し呼称に関連したヒヤリハットは 52% で前年度より 10% 減少するという目標を達成することができませんでした。

4. 学習と成長の視点

院外研修や e-ラーニングの受講率は、個人差はありますが前年度よりアップしており意識の高さが伺えます。目標管理は平均評価 3.5 以上で目標達成出来ましたが、リーダーレベル

と目標があっていないスタッフもあり今後の課題です。計画的にリフレッシュ休暇を取得することができ、適宜、師長、主任との面談を行いメンタルサポートに努めました但退職率は 15.9%と高い状況でした。

今年度からC O V I D-19 も 5 類に移行しましたが、感染対策は必須でクラスターが発生し、変わりなく悩まされることになりました。しかし、ビアパーティや忘年会も再開始し精神的なリフレッシュを図ることができたと思います。

今後も、安全で質の高い看護を提供できるように努力し、働きやすい環境を整えていきたいと思っています。

(江口 敦美)

2 階北病棟

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

看護 師	20 名	介護福祉士	2 名	ケアスタッフ	1 名
病棟クラーク	1 名				

2. 臨床実績

入院件数 :631 名

退院件数 :371 名

転棟件数 :282 名 (地域包括ケア病棟+緩和ケア病棟)

病床稼働率 :89.0%

- ・循環器心臓リハビリ件数 :59 例
 - ・ペースメーカー植え込み術・ジェネレーター交換術 :25 例
 - 整形外科手術 :18 件 シヤント造設術 :19 件
 - ・化学療法件数: 48 例
(悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、骨髄異形成症候群、ATL、白血病など)
-

3. 1 年間の活動と今後の展望

2 階北病棟は内科を主とした急性期治療を担う急性期一般病棟です。環器内科、血液内科を主とし、心不全・不整脈治療、ペースメーカー移植術、ジェネレーター交換、化学療法などを行っています。その他急性期疾患の救急搬入受け入れや、コロナ感染症患者の対応、がん終末期の受け入れも行っています。2023 年度より整形外科医師が常勤となり、骨接合術や骨頭置換術など整形外科の手術も行なわれるようになり、周術期の看護や整形外科看護に対しても専門知識の習得に努めています。また急性期治療が終えた患者が、速やかに在宅へ復帰できるよう入退院支援にも力を入れています。入院時から他職種で連携し想定される退院先や介護保険の状況を共有し、地域包括ケア病棟との合同カンファレンスも毎週開催しています。急性期から慢性期まで多岐にわたる疾患に対しより良い看護が提供できるよう、スタッフ一同が向上心を持ち、専門知識の習得、患者や家族との意思共有、安心して過ごせる療養環境の整備に努めています。今後は診療報酬の改定に伴い、高次機能病院からの転院をスムーズに受けられるよう、病棟間でさらに連携を取りベッドコントロール、スムーズな在宅調整が求められると思います。入院時から退院に向けた支援を行い、入退院の業務が効率よく行えるよう業務整備を行っていきたいと考えます。

(河野 真紀)

2 階南病棟

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

看護師 19 名 ケアスタッフ 2 名 クラーク 1 名

2. 臨床実績

一般病床稼働率	90.2%
地域包括ケア病床稼働率	89.3%

3. 1 年間の活動と今後の展望

2 階南病棟は、一般病床 10 床と地域包括ケア病床 27 床の混合病棟です。主に眼科と糖尿病を担当しています。2023 年度は眼科 708 名（うち外眼部 37 名、眼表面 8 名、前眼部 6597 名、後眼部 57 名、特殊眼科手術 9 名）、糖尿病 115 名の患者さんに対応させていただきました。そのうち 34 名に糖尿病教室へ参加してもらっています。昨年度同様、眼科の手術を受けた患者さんにはコロナ禍が続きご家族との面会が制限されたため、心細い入院生活を過ごされたと思います。また、糖尿病の患者さんには、自主的に運動できる場所の確保や栄養士からの指導が縮小され、不自由な環境の中での入院となったことを心苦しく思っております。2023 年度は病棟内でクラスターを発生させることがありましたが眼科手術を含め通常医療を皆様に提供できました。患者さんとそのご家族方には、感染予防対策にご協力にいただき感謝申しあげます。

今年度の取り組みとしては、病棟看護師の知識を深める目的として医師を中心に昼のカンファレンスで定期的な勉強会を継続していました。糖尿病教育入院患者の受け入れに関する基盤は十分に出来たと思います。2024 年度糖尿病内科の常勤医師が不在となりますが非常勤医師や主治医と協力し対応していきたいと思っています。

TQM 活動では日勤リーダー業務の時間外勤務を減らすことを目標に取り組みを行い院内での表彰も受けることができました。2024 年度も継続した取り組みを行い更に結果が出せることを期待しています。

（廣畑 直子）

3 階病棟

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

看護 師	16 名	准看護師	2 名	介護福祉士	2 名
ケアスタッフ	1 名	キーパー	1 名		

2. 臨床実績

平均在院日数：	31.3 日
居住系介護施設も含めた在宅復帰率：	81.2%
病床稼働率	： 90.2%

3. 1 年間の活動と今後の展望

3 階病棟は地域包括ケア病棟として、定められた入院期間の中で在宅復帰を支援しています。主な特徴として、一般病棟で急性期治療を終えた患者さんが元いた場所に帰ることができるように、リハビリと患者さんとその家族を含めた多職種で環境調整を行います。また、元いた場所に帰ることが困難な患者さんには、新しい療養場所と一緒に検討し支援しています。急な体調不良で入院が必要な患者さんや、介護者の様々な理由で一時的に在宅介護が困難な際は、地域包括ケア病棟で直接入院を受け入れています。

今年度の病床平均稼働率は 90.2%でした。4 年目を迎えたコロナ対策を継続しながら 9 月にクラスターが発生したため、入院されていた患者さんやご家族の方には心配をおかけしたと思いますが、昨年度より多くの地域の方や環境調整が必要な方に対応させていただきました。療養生活を支える地域包括ケア病棟におきましては、本来の役割を果たせる姿に戻りつつあると感じております。これからも地域の方やリハビリが必要な方、生活環境の調整が必要な方の支援ができるように、当院の地域包括ケア病棟の役割を遂行していきたいと思ひます。

看護研究では、2022 年度に取り組んでいた「ユマニチュード学習導入による看護師の認識と看護実践の変化」を福岡県看護協会の学会で発表することができました。今後の認知症看護に活かすことができるように努めてまいります。

（犬束 由起子）

4 階病棟

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

病棟師長 1 名 主任 2 名 正看護師 16 名 准看護師 3 名 ケアスタッフ 2 名
クラーク 1 名 MSW 1 名（専任）

2. 臨床実績

延べ入院数	: 953 名
病床稼働率	: 91.6%
新入棟患者数（転入数）	: 43 名
新退棟患者数（転出数）	: 41 名

3. 1 年間の活動と今後の展望

当病棟は主に神経難病（パーキンソン病（PD）・筋委縮性側索硬化症（ALS）・多系統萎縮症（MSA）多発性硬化症（MS）脊髄小脳変性症（SCD）大脳皮質基底核変性症（CBD））が進行して身体的障害のある患者さんを対象とした『障害者施設等一般病棟』です。

神経難病は原因・治療法が確立していない疾患で、症状も様々かつ進行するので日常生活動作（ADL）が低下し、よく躓く、歩けなくなる、飲み込みが悪くなる、流延（よだれ）が増える、よくむせるなど日常生活に支障をきたすようになります。私たちは患者さんが出来るだけ在宅または希望の場所で過ごせるように介助し家族への指導も行います。現在当病棟ではレスパイト入院を推奨しており、在宅療養中の患者さんが入院してリハビリしたり、検査したりする間、介護する家族の負担軽減も図っています。レスパイト患者は約 40 名前後以前より減少傾向にあります。それは進行する疾患であるため在宅での療養が限界となり、施設へ入所したり、療養型の病院へ転院されたり、亡くなられると言ったが重なっている状況にあります。定期的、または不定期にレスパイトは可能で、家族の介護負担にもなり集中してリハビリが行えるメリットがあります。コロナ禍の影響で外出・面会など制限があるデメリットもありますがそれでも入院すると動きがよくなる等のお声を頂き、入院して下さる患者さんもいらっしゃるの、減少したレスパイト入院患者数を増やすように、運営会議を始めたり、新規レスパイト患者さんの獲得に向け、リハビリ・MSW と共に努力しています。

当病棟は神経難病で ADL の低下があり、転倒・転落防止もしているが、転倒する患者さんが多く見られます。ヒヤリハットは 51 件、そのうち転棟・転落 38 件同じ患者さんが何度も転倒を繰り返すので何度もカンファレンスを行い転棟・転落防止対策に取り組んでいます。

在宅支援では訪問診療・訪問看護・MSW と連携、他事業所の居宅介護センターや訪問看護ステーション・とも連携を図り、継続した看護や在宅での情報交換も積極的に行っています。ALS・MSA で気管切開施行し呼吸器装着し在宅療養希望の患者さんの転入を受け、何度もカンファレンス・情報交換・家族への指導重ねて在宅療養へつないだり、進行に伴い在宅療養が困難になった患者さんの退院支援も多職種で連携して行っています。コロナも 5 類となり、面会等が緩和されて患者さんとの面会も可能となりましたが、当院での基準策を設けて実践継続しています。病室での面会や土曜日の面会も追加、院内でのコロナ感染・アフターコロナの受け入れ・クラスターを起こさないように院内感染対策委員会が主体となり感染対策もしっかり行っています。看護学生さんも患者さんまたご家族に快く同意して頂き、受け入れ

ています。尚、当病棟は吸引・注入指導看護師もおり、他施設より対象の方を受け入れ、患者さん、その家族の同意のもと指導をさせて頂いています。

今後とも感染対策、事故防止対策を徹底し患者さんが快く過ごせる環境を保ちつつ、看護を提供しスキルアップに努めて行きたいと思っています。

(下谷 美樹)

緩和ケア病棟

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

医 師 3 名

非常勤 精神科医 1 名（2 回/月） 非常勤 口腔外科医 1 名（1 回/週）

非常勤 臨床心理士 1 名（1 回/週） 看護師 21 名

ケアスタッフ 3 名 クラーク 1 名 ボランティア登録 30 名

2. 臨床実績

新入棟患者数 212 名（内転入数 80 名）

新退棟患者数 212 名

平均在院日数 33.0 日

病床稼働率 86.4%

在宅復帰率 17.0%

3. 1 年間の活動と今後の展望

2023 年度は、コロナ禍で失われていた緩和ケア病棟らしさを取り戻す事を目標にして、患者様、ご家族へよりよいケアの提供に努めました。患者様、ご家族が笑顔で参加できる季節を感じられるようなイベントの運営やグリーフケアとして茶話会を再開しました。初回月には 7 名のご家族にお越しいただき生の声を聴く事が出来ました。2024 年度はこの数年間に退院された 350 名の方への遺族会（こすもす会）を再開したいと考えています。そして、こういったイベントにボランティアの存在がかかせません。当病棟では開設当初からチームの一員として長く活動継続されている方が多くいらっしゃいます。しかし感染対策上、活動内容はお花の活け替えだけとなり活動意義を感じられないままの方もおられたと思いますが、3 月のボランティア養成講座後には 4 名の新しいメンバーを迎えました。最近はお患者様のお部屋へお花やお茶の配達で会話を交わすことが当たり前になってきました。時には手を握りそっとそばにいる事で安心していただける方もおられます。ボランティアさんが継続して活動していただいていることは当病棟の強みだと感じています。それぞれの職種が協働して患者様、ご家族により良いケアを提供し生活に支障を来している辛い症状を緩和することが第一目標です。そして「家に帰りたい」と思われる方へは積極的に在宅支援を行います。ご自宅で生活するために自宅環境の調整やサービスの提供と一緒に考え退院後も安心して生活ができるようにサポートを継続しています。今年度は退院された方へのご自宅に 5 件お伺いすることが出来ました。お伺いすると笑顔で迎えてくださいます。これからもその人らしく生活できるようにチームで心を込めたケアを目指します。

（高田 真弓）

中央材料室 手術室

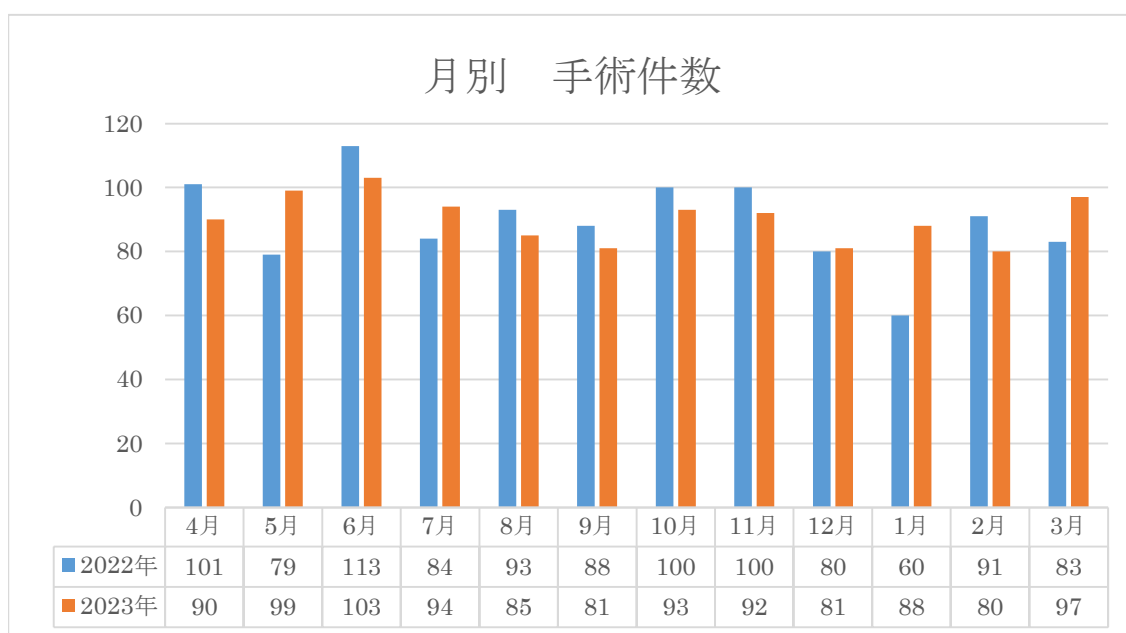
1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

看護師 4名
准看護師 1名
キーパー 1名（パート）

2. 臨床実績

手術症例数：1085例

（内訳：眼科 1024例、整形外科 21例、循環器内科 24例、腎臓内科 8例、外科 8例）



3. 1年間の活動と今後の展望

<手術室>

2023年度は外科と整形手術の活性化により、新しい物品の導入やシステムの構築に力を入れてきました。整形手術に対応できるベッドや滅菌コンテナの購入に加え、適切な麻酔管理ができるよう筋弛緩モニターも購入し体制を整えていきました。また、日々新しい術式が増えていきましたが、その都度マニュアルの改訂を行い、次回の手術に向けた予習や育成ができる環境を整えていきました。周術期医療の質向上に向け、勉強会の実施や個別指導の他、実際に手術体位やポジショニングのシミュレーションを行い安全安楽な方法も追求していきました。術前カンファレンスでは、整形外科医師・内科医師・看護師・理学療法士・薬剤師などの多職種が集結し想定し得る合併症などの対応策を講じることで患者さんの安全管理の向上に寄与しています。麻酔科医による術前評価・麻酔説明も行っており、以前よりも患者さんの不安の軽減や安全な麻酔管理が期待されています。

今後も、患者さんに高度で安全な手術を提供できるよう、必要な方策は積極的に取り入れ、医師と協力して手術室運用業務の適正化に取り組んでいきます。

<中央材料室>

物品の適切な提供を行っている中央材料室では、個々の物品管理能力が必要とされます。2023 年度からスタッフ全員が物品管理を意識できるように、物品定数の見直しや物品の請求に携わるような業務分配を行っていきました。SPD物品に関しては、物品の請求日と納品日を可視化できる管理ツールを作成することで個々の管理意識向上に繋がりました。また、物品の流動が把握できたことで、物品管理に対応できるスタッフが増えました。使用頻度の少ない物品に関しては、日々、定数の見直しや検討を行いデッドストックが発生しないよう取り組んでいます。

今後も責務を果たせるように日々邁進していきます。

(坂田 夢乃)

外 来

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

看護 師	20 名
看護師（パート）	4 名
准看護師（パート）	1 名
眼科視能訓練士	3 名
クラーク	5 名

2. 臨床実績

各診療科参照

3. 1 年間の活動と今後の展望

新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行した現在でも、四季を問わず罹患する状況が続いています。発熱患者への感染症対策、患者の症状を見落とさないように継続した観察が周知でき、安心した診療提供へ繋がる事が出来ています。外来は、子育て世代のスタッフが半数以上を占め、家族の体調不良などの突発休もあり、体調管理を行い協力し調整することで診療への影響が最小限になるように対応できています。また、仕事と子育ての両立を目指したワークライフバランスの実現も求められており、働きやすい職場環境がとても重要だと感じています。

ここ数年の外来は新型コロナウイルスの影響により、外来患者数減少の問題を抱えています。各部門と意見を出し合い、病院全体で地域活動参加を行う働きかけや、近隣の医療機関、施設との連携をより一層密にすることで、外来患者の増患に向けた取り組みが求められています。本年度、救急車受入れ件数は、320 件と前年度より 7 件足りない結果でしたが、年々増加傾向にあり、救急患者の対応も積極的に行う体制が定着しています。

当院は、内科、眼科、整形外科と新患の方も可能な限り予約なしでも対応できるように、断らない医療提供を目指しています。本年度より整形外科は常勤医師での体制となり、臨時対応も柔軟にでき、整形患者の増加と整形外科 OPE 件数の増加に繋がりました。また、眼科においても、新型コロナウイルスの影響が大きく OPE 件数も減少していましたが、本年度は年間 1024 件と増加し、手術前から退院後まで OPE 室担当看護師が関わることで安心して手術を受けて頂ける環境の提供が出来ています。

本年度、糖尿病患者のセルフケア能力について看護研究に取り組み、血糖コントロールを悪化させてしまう要因を抽出することが出来ました。結果を基に療養指導の重要性を実感でき今後の支援に繋げていきたいと思えます。

医療は地域完結型となり、生活習慣病などの重症化予防・再発防止の重要性が高まっています。在宅療養生活の継続、身体症状や QOL の改善など外来での療養指導や支援がさらに推進していく事が求められており、住み慣れた地域で長く生活ができるように、患者様に寄り添った看護提供を目指し支援していきたいと考えています。

（高田 千寿香）

訪問看護ステーション かりん

1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

訪問看護師 7名（管理者含む） 常勤6名 非常勤1名
理学・作業療法士兼任 4名 常勤換算数 1.2名 医療事務 1名

2. 臨床実績

訪問看護の年次推移			
	2021年度	2022年度	2023年度
利用者の総数	602名	606名	667名
訪問回数（リハビリ含む） 月平均の回数	4587件 382件	5653件 471件	6175件 514件
看護師による訪問の回数 看護師による月平均の回数	3771件 314件	4396件 366件	4371件 364件
新規契約者の総数	78件 （内訳） 医療保険 56件 介護保険 22件	86件 （内訳） 医療保険 66件 介護保険 20件	75件 （内訳） 医療保険 50件 介護保険 25件
終了者の人数	59件	77件	62件
看取りの人数	24件	26件	18件

3. 1年間の活動と今後の展望

2023年度の利用者は、平均約55名/月でした。前年同様に約8割が医療保険、約2割が介護保険での介入となっています。村上華林堂病院では、緩和ケア内科や脳神経内科があるため、医療保険での介入の割合が多くなります。当訪問看護ステーションの特徴でもあります。

紹介は当院だけではなく、大学病院、がんセンター、近隣の病院、居宅介護支援事業所、地域包括支援センターからの紹介もあります。

医療の公共性を重んじ、信頼される医療を通じて地域社会に貢献するという病院の基本理念をもとに、利用者を訪問しています。

緩和ケアだけではなく、訪問看護を利用される本人またご家族へ、これから過ごす場所を確認しています。本人からは、「できるだけ家で過ごしたい」、「最後は自宅で死にたい」と話される方が多くなってきています。ご家族も、「できるだけ家でみてあげたい」と言われる方が増えているように感じています。思いに沿えるよう、主治医を含め、多職種との連携を図りながら、安心して自宅での生活が継続できるよう質の高い看護の提供に努めていきます。

「あなたたちが来るのを待っていた」と思って頂けることに訪問看護師の価値があるのではないかと思います。地域社会に貢献できるよう努力してまいります。

（森山 千絵子）

居宅介護支援事業所「かりん」

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

介護支援専門員 5 名 事務 1 名

2. 臨床実績

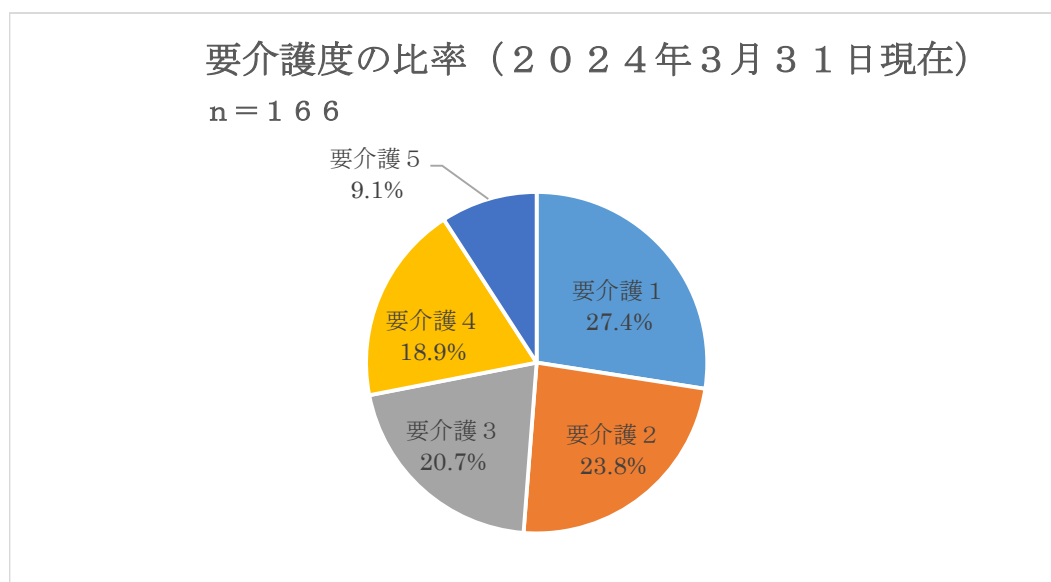
居宅支援件数実績

	2022 年度実績	2023 年度実績
年間支援件数	2,402 件	2,060 件
月平均件数	200 件	172 件

※特定事業所加算Ⅰ算定

※特定事業所医療介護連携加算算定

※2023 年度ターミナルケアマネジメント加算算定 7 件



3. 1 年間の活動と今後の展望

居宅介護支援事業所「かりん」は、緩和病棟を中心に各病棟担当のMSWや外来からの支援依頼もあり、緩和ケアや神経難病の利用者さんが比較的多いことが特徴です。地域包括支援センターからの支援依頼も定期的に相談があり、地域における当事業所の信頼を感じていますが、ケアマネジャーの欠員が出たこともあり、居宅支援件数は 2022 年度から減少となりました。

要介護度の平均では、要介護 3 以上の介護度の高い利用者さんが、年間平均で約 45% となり、特定事業所加算Ⅰを継続算定できています。また、年間 7 件のターミナル期の利用者さんの在宅看取りに関わらせていただき、特定事業所医療介護連携加算の継続算定要件を達成できています。今後もターミナル期の利用者さん、ご家族が、人生の最後の時間を少しでも安心して過ごすことができるケアマネジメントを提供できるよう、2024 年度も訪問診療の先生方や訪問看護師、ソーシャルワーカー等の多職種との連携を大切にしていきたいと思っています。

利用者さんは、様々な病気や生活背景をお持ちです。加算要件を満たしつつ、幅広いニーズに対応できるよう、研修会や居宅連絡会への参加はもちろん、週1回のミーティング、毎月1回の業務カンファレンスを行ない、介護支援専門員の資質向上や普段の業務改善を継続していきます。

今後も地域活動への貢献や、他機関・多職種との連携強化にも力を入れ、地域の皆様や関係事業所の皆様から、これまで以上に信頼される事業所を目指し、スタッフ一同努力をしてまいります。

一緒に働いてくれるケアマネジャーさんを募集中です。よろしくお願いいたします。

(西島 勝也)

訪問リハビリテーション

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

理学療法士（PT）2 名 作業療法士（OT）2 名 言語聴覚士（ST）1 名

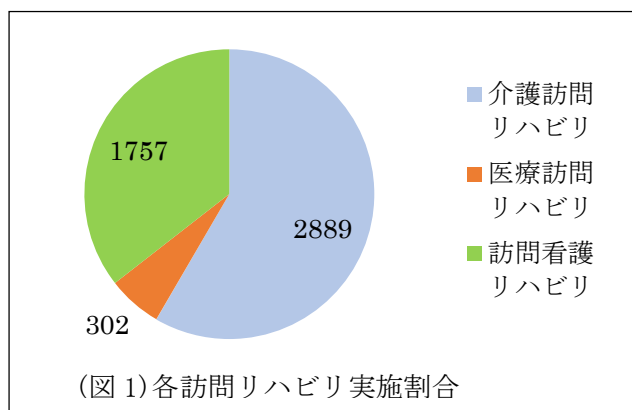
2. 臨床実績

訪問リハビリテーション（リハビリ）は、介護保険と医療保険の訪問リハビリ、および訪問介護ステーションからの訪問リハビリを実施しております。

2023 年度の実施件数は、別表（表 1、図 1）の通りとなっています。

（表 1）各訪問リハビリ実施件数

訪問リハビリ種別	実施件数
介護訪問リハビリ	2889 件
医療訪問リハビリ	302 件
訪問看護リハビリ	1757 件



3. 1 年間の活動と今後の展望

訪問リハビリでは、2023 年度の目標を「院内からの新規依頼増」「効果判定推進によるリハビリの質向上」「リハビリ会議の実施推進」とし、取り組みました。

「院内からの新規依頼増」は、前年度の依頼件数が少なかった背景があり、その要因分析としてのスタッフアンケートから開始し、リハビリ室内に訪問リハビリの紹介チラシを設置し、周知を図りました。結果としては、昨年の紹介件数 8 件より 1.5 倍増の 12 件と増加が認められました。「リハビリの質向上」に関しては、これまで（表 2）の評価項目を毎月測定していましたが、対象が維持期の方であることと、評価時間より治療時間を多く確保することを考え、半年に 1 回の定期評価に変更しました（新規利用者については介入 1 カ月後）。結果として、新規利用者の 1 カ月後では活動範囲の拡大がみられ、早期の訪問リハビリの効果が明らかになりましたが、介入 6 か月を超える利用者では変化がほぼみられておらず、能力維持と、在宅生活への定着が図れている反面、次のステップに繋がらない反省点が出てきました。

（表 2）定期評価項目

①Hb-LSA（活動範囲）	②握力（筋力）	③FIM（ADL）
④MSQ（認知）	⑤Zarit8（介護負担）	

「リハビリ会議の実施推進」は、ZOOM 会議を活用し、年間を通し 6 件の会議を行いました。今後は、ZOOM 会議だけでなく、訪問診療の医師と連携した会議開催も拡大していきたいです。

（山口 良樹）

通所リハビリテーション事業所（デイケア）

1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

6-7 時間

理学療法士（PT）	4 名
作業療法士（OT）	1 名
看護師	3 名
介護福祉士	8 名
ケアスタッフ	6 名（パート 3 名を含む）
事務	2 名

1-2 時間（短時間通所）

理学療法士（PT）	5 名
介護福祉士	6 名（パート 6 名、医療リハビリと兼任を含む）

2. 臨床実績

2023 年度の 1 日の平均利用者数・社会参加数は、表 1 の通りとなっています。社会参加率は 5%を超え、移行支援加算を算定しています。また、6 - 7 時間は、リハビリテーション提供体制強化加算を、1 - 2 時間は、理学療法士等体制強化加算を算定できるリハビリスタッフの体制があります。2023 年度は、中重度者ケア体制加算を算定しています。看護師が 1 日に 2 名おり、重度な方を受け入れられる体制を整えています。

<表 1>

	1 日の平均利用者数	社会参加数
6-7 時間	36.1 名	5 名
1-2 時間（短時間通所）	23.3 名	5 名

※ 社会参加 = ADL 向上や自宅での役割を持ち卒業された方。デイサービスへ移行された方々。要介護の方・要支援の方を合わせた人数を示しています。

3. 1 年間の活動と今後の展望

2023 年度は、「健康の維持・改善」、「自立支援」、「独居の認知症の方への在宅支援」に重点的に取り組み、月に入院される割合が 6.4%から 5.8%へ減少しました。

2023 年度も「地域のお年寄り利用者様が在宅において、その人の有する能力に応じ、その人らしく日常生活が出来るように支援します」を理念として、利用者様・ご家族により質の高い支援が出来るようにスタッフ一同努力をしております。

（椎葉 博基）

事務部総務課

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

事務職員	8 名	（課長 1 名 主任 2 名）
事務職員（パート）	2 名	
メッセージ・管理（パート）	5 名	

2. 1 年間の活動と今後の展望

2023 年度は、総務課職員が広報委員会の中心となり、引き続き広報活動に力を入れました。2022 年度にリニューアルした病院案内は、年度初めに更新を行いました。掲載内容がタイムリーな情報となり、興味をもって見ていただけるようになったのではないかと思います。また、ホームページやインスタグラムの QR コードを掲載することにより、より詳しい情報を簡単に見ていただく工夫も行いました。

経理関係ではインボイス制度、電子帳簿保存法等により業務が煩雑となりましたが、その他の部分で業務改善を行い、時間短縮と業務軽減を図りました。来年度継続して更に業務時間短縮を図る計画をしています。経理に限らず、総務課が取り組む重要課題だと思っています。

2022 年度後半より担当することとなった健康診断業務は、制度の変更、インボイス制度開始などによる業務手順見直しを行うと共に、健診委員会の一員として健康診断を診療に繋げるための取り組みも行いました。事務作業だけでなく、病院の増収に繋がる取り組みを行うことは、組織の一員として広い視野を持って業務を行うこととなりました。

8 月からは診療材料の共同購入を開始し、経費削減を実現しました。作業が煩雑になるというデメリットもありましたが、これは業務手順の見直しなどにより解決できると考えています。

システム関連の業務としては、セキュリティ対策、院内の通信整備に注力した 1 年でした。患者様からご要望をいただいていたものの、建物の構造上うまく進めることができなかった外来の Wi-Fi 整備を行いました。来年度は病棟にも広げる予定です。

2023 年度は、集客、増収、経費削減など多岐にわたる改善に取り組んだ 1 年でした。2024 年度も村上堂病院に興味を持っていた方、利用された方が、多くの医療機関の中から村上華林堂病院を選んでいただけるよう、引き続き取り組んでまいります。

（瀬戸 早苗）

事務部医事課

1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

事務職員（医事課内・受付含）	10名
事務職員（医事課内・受付含）パート	4名
診療情報管理室職員	3名
医師事務作業補助者	6名
医師事務作業補助者 パート	3名
病棟クラーク パート	4名

2. 1年間の活動と今後の展望

2023年度の活動の中心は、「スタッフ育成」と「業務の質向上」でした。

スタッフ育成については、継続的に活動しております。主任を中心に、医事課の勉強会開催や、院外研修への参加推奨をこれまで以上に力を入れ、少しずつではありますが、研修への参加数も増えてきました。また、相互補完し合える環境づくりの為、会計や診療費算定等の業務を全てのスタッフが出来るよう指導を続けています。

業務の質向上については、医事課内スタッフはレセプト業務について、全体的な底上げによりスタッフ間の業務量の偏りを軽減すること、返戻レセプト件数の減少させること、を目標としました。3年前に開始したTQM活動（返戻レセプト件数減少）を継続し、全員で返戻内容把握、再請求準備を行う方式をとることで返戻理由を理解するスタッフが増え、スタッフ底上げにつながっています。ただ、欠員補充が追いついていない状況であり、ひとりひとりの業務負担が大きくなっているため、知識はあっても日々の業務に追われて業務の精度が上がらず、結果として返戻件数等が減らない状況が続いています。診療情報管理室は、病棟クラーク、医事課内スタッフと連携し、病棟での必要書類不備、スキャン誤り等を減少させるべく取り組みました。また、電子カルテ導入期にストップしていた「質的監査」を再開し、診療録の質を更に向上させるための取り組み体制を整え、監査への医師の関与についても、実現に向けて調整継続中です。医師事務室については、腎臓内科医師の代行業務範囲を拡大する等、医師事務作業補助者としての活動の場を拡げるとともに、スタッフ底上げの為、陪席科のローテーションも継続しています。

医事課内スタッフについては、患者負担、レセプト請求及び診療に係る様々な業務、診療情報管理室については、診療録記載全般と国に提出する様々なデータ作成に関する業務、医師事務作業補助者については、医師が行う指示、記載等及び書類作成に関する業務、そして病棟クラークは、病棟における記録方法変更対応及び患者対応、と業務内容は異なりますが、それぞれが調整を重ね、当院に合った形を目指して活動してきました。今後もそれらの活動を継続していきます。

システム導入と時間外業務減少により、子育て中の職員も安心して働ける環境整備と、教育による医事課全体のレベルアップを今後も進めていきます。

（渡邊 英則）

地域連携室

1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

医師 1名

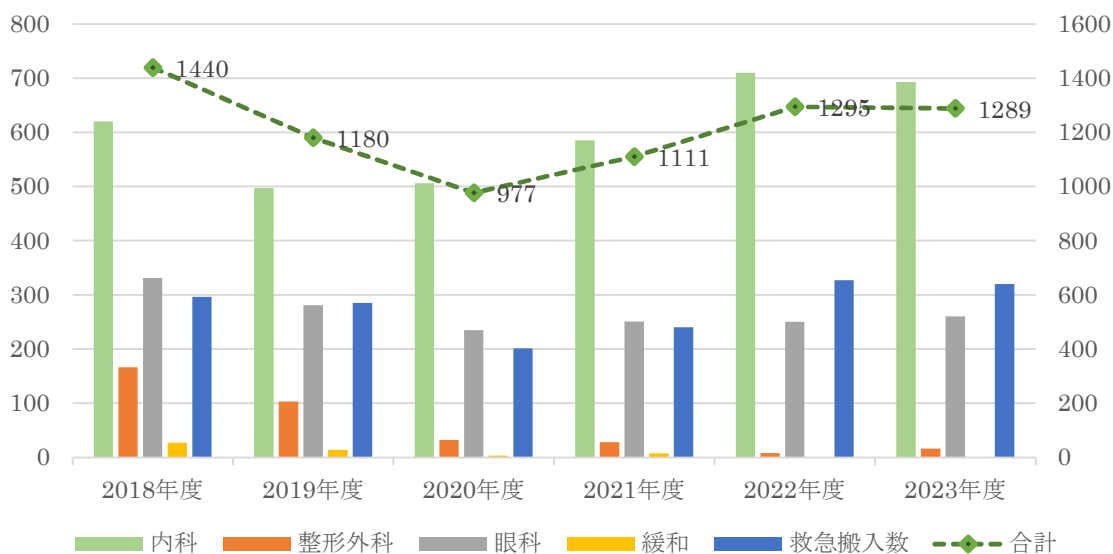
医療ソーシャルワーカー 5名

看護師 3名

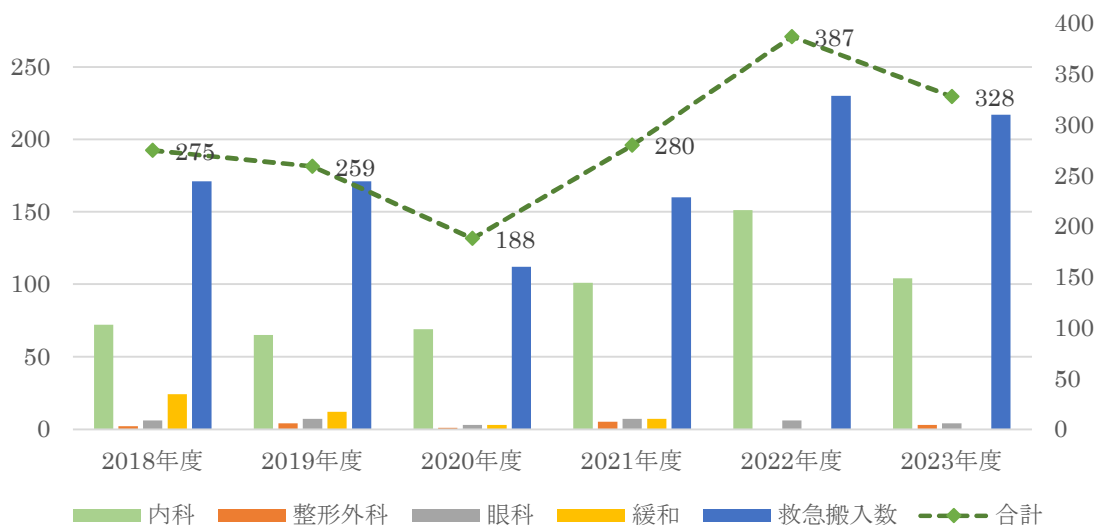
事務 4名

2. 臨床実績

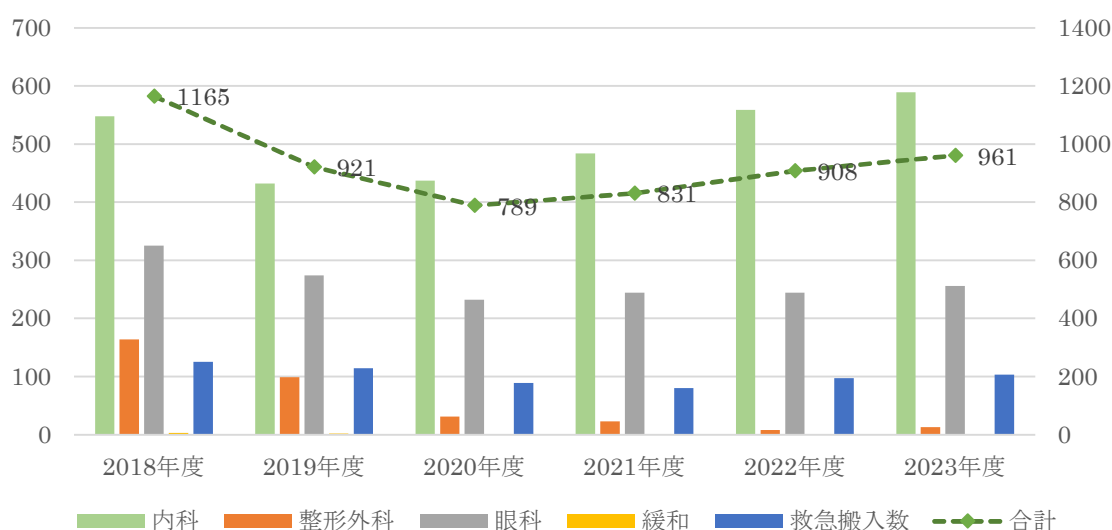
年度別紹介患者内訳（入院外来含）



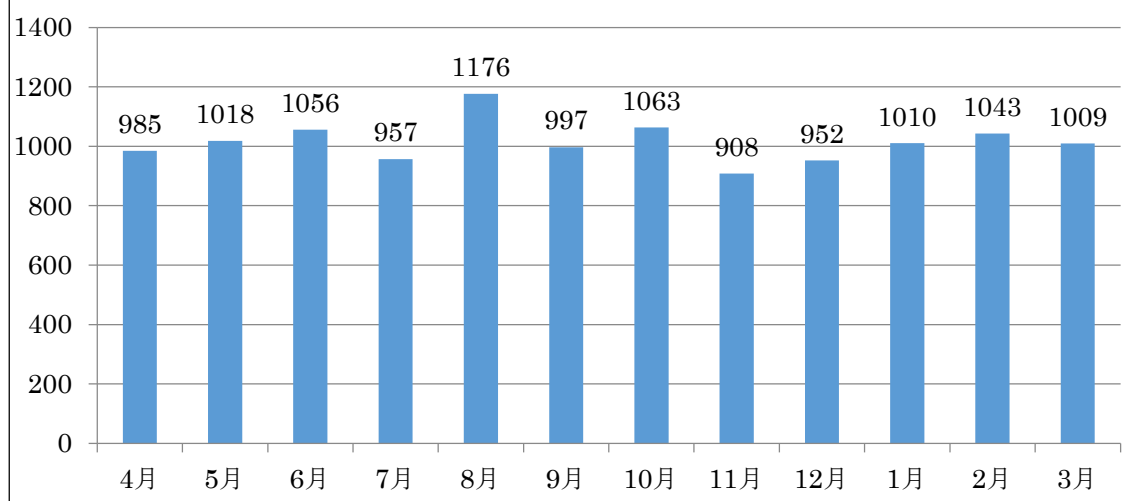
年度別紹介患者内訳（入院）



年度別紹介患者内訳（外来）



ソーシャルワーカー相談取扱い件数



3. 1年間の活動と今後の展望

〈連携業務〉

地域連携室は連携業務と入退院支援業務、総合相談業務を主な役割としています。その業務を通して地域の医療、福祉、保健機関との連携を図り、患者さんが安心して住み慣れた地域でその人らしい生活を送ることができるように支援することを目指しています。

連携業務に関しては、地域の医療機関や介護福祉施設などと密接な連携を図るための窓口となり、患者さんにより良い医療を提供できるよう努めております。具体的な活動内容としては近隣のクリニックを年間約 400 回訪問し、返書を直接手渡しするなど顔の見える交流を心がけております。また、新型コロナウイルス蔓延後は「web 版 福岡西部 介護と医療の連携の集い」を定期的を開催し、多数の施設、事業所の方々にご参加いただき、積極的な情報の交換を行っております。

地域包括ケアシステムの構築、推進が求められる中、在宅療養支援病院として切れ目のないシームレスな医療が提供できるよう今後も努力していききたいと思います。

(八島 佐知)

〈入退院支援業務〉

入院が決まった方に入退院支援看護師が入院の当日または事前にご本人、ご家族と面談を行っています。面談の内容としては主に入院前の身体状態及び生活状況、家族背景や住環境、また介護保険認定の取得状況や服薬中の内服薬の管理方法、お薬のアレルギー、アレルギー食材などをお尋ねします。治療がスムーズに行われるよう、退院へ向けた支援が入院時から取り組むことができるように院内外の多職種とも積極的に連携をしています。

また、緩和ケア病棟へ入院を希望される方は、事前に緩和ケア病棟担当看護師、MSW による面談を行い、安心して入院していただけるように支援を行っています。2023 年度は緊急入院を含め、732 件の入院支援を実施しました。

入退院支援を担当する看護師は MSW と連携を取りながら入院された患者さんが安心して入院生活を送ることができるように、また退院後も住み慣れた環境、地域での生活が継続できるように入院時の早い段階から支援を開始し、カンファレンスで各部署のスタッフと情報共有を行い、退院後の生活を視野に入れた支援を行っています。予約入院の患者さんだけではなく、緊急入院の患者さんへも積極的に介入し、病気によって生じた様々な問題に対して患者さんやご家族と共に考え、解決に向けての支援を行っていききたいと思います。

(竹内 直美)

〈総合相談業務〉

正面玄関を入ったところのカウンターに総合相談窓口として月～金曜日は 9：00～17：00、土曜日は 9：00～12：30 まで地域連携室の有資格者 1 名が交代で常勤しています。相談内容としては外来受診相談、介護に関する相談、緩和ケア相談などご自身及びご家族の困りごとや悩みごとなどの相談をお受けしております。2023 年度は 468 件の相談がありました。相談内容によっては、専門スタッフのいる各担当部署へご案内をさせていただいています。プライバシー保護の観点から個室での相談も行っています。今後につなげる為、情報共有を行うカンファレンスを週 1 回開催しています。

オープンカウンターとなっており、今後もお声がかけやすく、相談をしやすい環境づくりに努めてまいります。

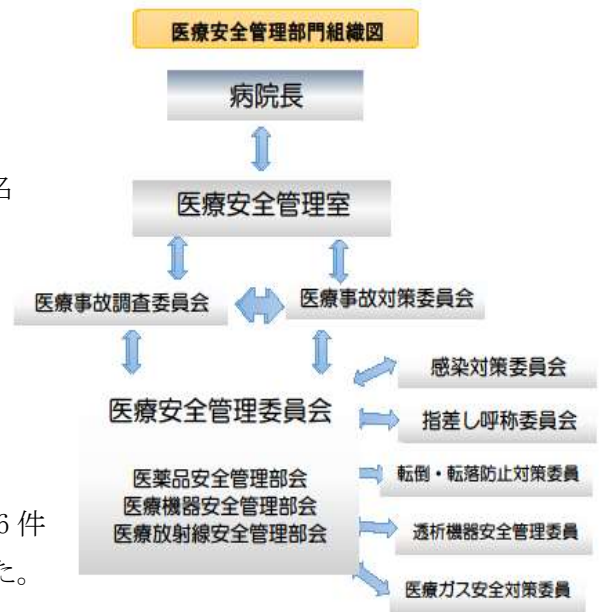
(竹内 直美)

医療安全管理委員会

1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

【構成メンバー】

医師 2 名、医療安全管理者 1 名、看護部長 1 名
副看護部長 1 名
各部署責任者 18 名



2. 1年間の活動と今後の展望

1) 2023 年度総括

事故報告件数は医療事故 14 件、転倒・転落 16 件
針刺し・切創事故は 4 件と前年度より増加した。

（図 1 参照）



図 1 事故報告件数

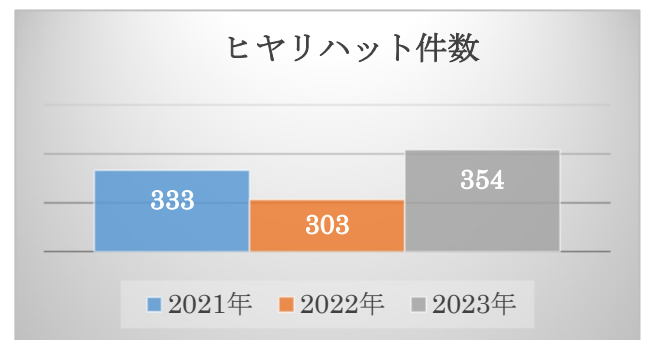


図 2 ヒヤリハット報告件数

ヒヤリハット報告件数は 354 件と前年度より増加、内容は与薬（28%）注射（16%）の順に多い。（図 2.3 参照）

ヒヤリハットレベルでは「レベル 0」報告が全体の 84.0%、「レベル 2」は 2%、「レベル 3a」は 1%であった。（図 4 参照）

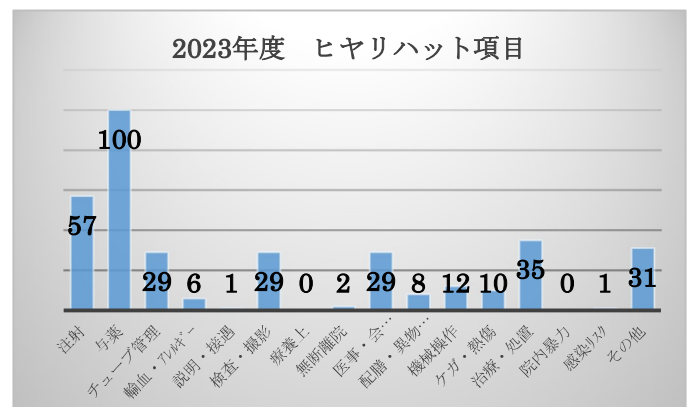


図 3 ヒヤリハット報告内容

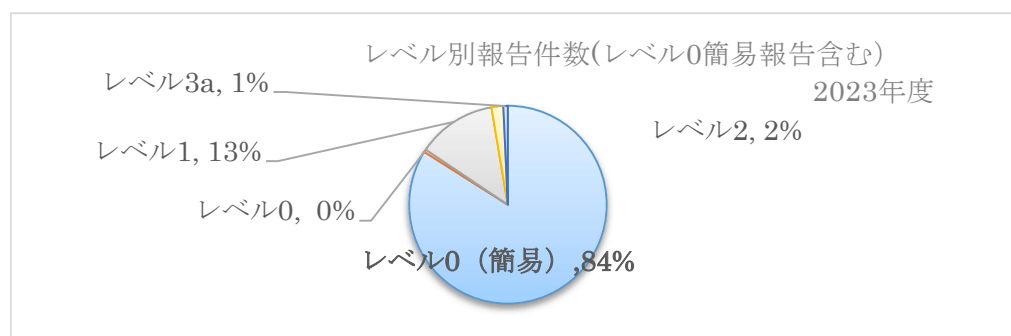


図 4 患者影響度

また、オカレンス報告は 2023 年度「来院後 24 時間以内の死亡事例」12 件、「予期せぬ死亡」1 件の報告があり、医療安全管理室にて検討し、全て追加報告書の必要性なしとの判断であった。

2023 年度に実施した主な取り組みは以下のとおりである。

- (1) 玄関マットの隆起による、転倒リスクあり、材質や厚みや固定方法を協議し、改善
- (2) 輸液ポンプがバッテリー駆動すると知らず、電源を切って患者移動を行った事例があり、新人看護職員研修時に機器操作だけでなく看護場面を想定した補足説明を追加することとした。
- (3) 病棟ストック薬の「ゾピクロン」「エスゾピクロン」の間違い事例より、常備薬から「ゾピクロン」を削除した。

2) 今後の展望

医療安全管理室メンバーが全部署を対象に年 2 回の定期巡回を行っている。定期巡回の結果、アレルギー項目の確認方法・入力方法の理解が不十分であり、再度周知するよう目標に挙げたが、改善しなかった。

薬剤に関するヒヤリハットの分析、対策検討は医薬品安全管理部会の中で継続する。またヒヤリハットレベル 0 報告の増加を受けて、正確なレベル判定のための体制づくり、再発防止への活用方法の検討、レベル 2 以上の報告件数の減少を目指して指差し呼称委員会での活動を活性化させる。

(三井 淑子)

医薬品安全管理部会

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

薬局長 1 名（医薬品安全管理者）、医師 1 名、医療安全管理者 1 名、看護師長 3 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

1) 2023 年度の総括

昨年度のヒヤリハット報告件数は全体で 355 件、そのうち注射・与薬に関する報告件数は 158 件（45%）であった。

薬剤に関するヒヤリハット事例の中には、薬剤の取り扱いミスによる事例もあり、新人看護師研修を通して当院における過去のヒヤリハット事例を紹介し、医薬品の取扱いに注意が必要な薬剤について院内研修を実施した。

次に、2021 度から取り組んでいる「配薬漏れ」に対する対策として、全病棟で考案した対策を各スタッフが厳守しているかのアンケートも昨年同様実施した。さらに各病棟で取り組んでいる対策を病棟全体で情報共有できるよう看護師主任を中心に働きかけを行った。その結果、スタッフが投薬時の院内手順を厳守する意識付けが初年度と比較すると改善された。その他、ヒヤリハット事例をもとに病棟に常時配置している類似薬の見直しを行ったり、オンラインによる薬剤安全セミナーの受講、医療安全研修においては日本医療機能評価機構に掲載された医療安全情報の事例紹介とそれに関連する当院のヒヤリハット事例を紹介し、対策について情報共有できるよう取り組みを行った。

2) 今後の展望

次年度も定期的に委員会を開催し、医薬品使用時の安全対策の実施が継続的に行われているかを見直すとともに、各部署での問題事項を把握しながら、事例の分析・対策に繋がっていきたいと思います。

（貝田 裕彰）

医療機器安全管理部会

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

医療機器安全管理者（医師）1 名、 医療安全管理者 1 名、 看護師長 1 名、
臨床工学技士 1 名、 放射線技師 1 名、 臨床検査技師 1 名、 事務職員 1 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

医療機器安全管理部会は平成 19 年に発足し、医療安全委員会の部会として医療機器に係る安全管理を行っています。本会は必要時に開催され、以下の活動を行っています。

1. 医療機器安全管理部会議を開催し、医療機器に関する事故やヒヤリハット事例の検討と安全管理委員会への報告
2. 医療機器保守点検に関する計画の策定と実施
3. 医療機器の把握と管理および適切な情報提供
4. 人工呼吸器や体外式除細動器などの生命に直接影響を与える医療機器の厳重な管理と点検
5. 医療機器の添付文書の管理
6. 医療機器安全使用のための職員研修の実施
7. 医療機器の安全管理に関わる研究会や講習会への参加

2023 年度は医療機器の不具合に関連する事例は 5 件報告されました。報告の内訳は、機器内部の部品が原因の誤作動が 4 件、装置の経年劣化が原因の不具合が 1 件でした。万全の体制をとっているつもりであっても、トラブルが起こってしまうことを経験して、様々な知識を習得して知見を広げ、些細な変化に気づける観察力を鍛えることの大切さを学び、これからの業務に活かしていきたいと考えています。教育・管理不足が原因の報告に関しては昨年度 4 件に対し 0 件と減少しました。これは、昨年度から取り組んできた再教育や研修後の簡易テストで知識の定着に努めてきたことが良い結果に結びついたと考えます。職員研修は計 24 回開催し、医療機器の安全使用に努めています。

（藤本 菜摘）

医療放射線安全管理部会

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

医療放射線安全管理者（放射線技師）1 名、医師 1 名、看護師長 1 名、言語聴覚士 1 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

医療放射線安全管理部会は 2020 年に発足し、当院の医療行為による被曝の管理を行うと共に、以下の活動を行っています。

1. 医療放射線安全管理部会議を定期的に行い、医療安全管理委員会へ報告
2. 診療用放射線の安全利用の指針の策定
3. 診療用放射線の安全利用への取り組み
4. 患者の医療被曝線量管理および線量の記録
5. 線量評価および線量の最適化の検討
6. 医療放射線業務に従事する病院職員への研修の実施
7. 放射線の過剰被曝その他放射線診療に関する事例発生時の対応

2023 年度の CT 被曝線量について診断参考レベル DRL s 2020 と比較した結果頭部 65.5% 胸部 61.5% 胸部～骨盤 67.7% 上腹部～骨盤 48.4% 肝臓ダイナミック 53.6%

どの部位においても基準値の 48～68%程度に収まり、低線量での検査を実施することができました。また、1 月に行われた医療安全相互チェックでは、他施設からの訪問審査を受け、医療放射線安全管理を適正に実施しているとの評価（評価 4）を頂きました。

今後も定期的な被曝線量管理を行い、患者様に安全な検査を受けて頂けるよう継続していきたいと思います。

（久間 伸彦）

転倒・転落防止対策委員会

1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

【構成メンバー】

委員長（看護師長）1名 病棟看護師（4階、3階、2階北、2階南、緩和ケア）
リハビリ1名 デイケア1名 血液浄化センター看護師1名

2. 1年間の活動と今後の展望

年間目標

- ・患者さんの療養環境を安全に保つことができる
- ・転倒転落予防に関するリスク感性を高める事ができる
- ・各部署の問題点を抽出し、改善に向けた取り組みができる
- ・転倒転落ヒヤリハット報告のレベル2、3aを前年度より10%減にできる

	医療事故件数	ヒヤリハット件数	レベル2	レベル3a
2023年	16	240	37	23
2022年	10	214	42	31

目標に対して今年度も、2か月に1回の部署巡回を行いました。違う視点で療養環境を安全に保つため、これまでの巡回方法を変更しました。巡回する側が患者選択をすることで日頃の環境を確認することができ、安全な環境の適性或記録の不備など転倒転落の再発防止に努めました。委員会会議では担当を決め、毎回報告されたヒヤリハットから事例報告を行いました。他部署の傾向や対応、取り組みを共有し、それぞれの部署の反映することで、自部署の転倒転落防止の意識の向上を図りました。血液浄化センターではこれまで外来患者の転倒防止対策が課題でしたが、経路に手すり設置やリスク患者は付き添い歩行をすることで今年度は転倒転落を0件で終えることができています。

今年度の目標はほぼ達成ですが、医療事故が増加しています。傾向としてセンサー類のON/OFF確認が要因となった件数が多かったため、来年度の課題として取り組みます。

（犬束 由起子）

指差し呼称委員会

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

委員長（医療技術部主任） 1 名、 副委員長（看護師長）
各部署（18 部署）代表スタッフ 1 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

指差し呼称委員会は、指差し呼称の意識向上とその徹底により、医療事故ならびにヒヤリハットを防止することを目的に設置されている。

今年度は、①「指差し呼称が関連したヒヤリハットの割合が 60%以下になる」②「レベル 0 簡易報告を前年度より 1 人 1 事例報告、レベル 2 以上のヒヤリハットを前年度より 10%減少させる」2 つの目標を設定して活動を行った。

①に関して、指差し呼称に関連したヒヤリハットの割合は、2022 年度 60%、2023 年度 58.7%と目標達成出来ている。本年度より、指差し呼称の動画の活用は各部署に任せ、新入職者や中途採用者のみ使用するよう変更した。指差し呼称の意識調査では、指差し呼称を行うことで、「間違いに気づいた」88%、「予防できたインシデントの経験がある」78%という結果にて、前年度よりアップできている。指差し呼称を確実に出来るように、各部署間で継続して取り組む必要がある。

②に関しては、1 人 1 事例が、達成できなかった部署もあったが、前年度と比較し、総報告件数は減少している。2 以上のヒヤリハットは、2022 年度 21%、2023 年度 16.5%と前年度より 10%減少は達成できなかった。前年度も達成できていない為、次年度は目標設定もしくは方法を検討する必要がある。

また、継続した取り組みとして、自部署で起こる可能性のある事例を取り上げて KYT の勉強会の実施を行った。身近に起こりうる事例を使用することで、スタッフの指差し呼称への意識付けを行うことや注意喚起が出来た。

意識調査では、昨年度比較、知識・認識について、全職員とも前年度と比較しても変わらず同じ傾向であった。

実際の場面では、指差しによる予防効果・必要性を認めているものの、後述にも述べた、「忙しい・忘れる」などの理由で指差しを省くことがあり、各職種の状況によって難しい点もあると思われるが、余裕を持って指差し呼称が出来る職場環境の整備も必要ではないかと思われる。

スタッフ属性では、前年度と変わらず、3 年以上のスタッフが 61%となっている。毎年指差し呼称研修や KYT 研修を行っており、作成したツールを各部署で活用し、入職時の OR や、委員が中心となり、部署内での指差しに対しての認識を継続して高めていく必要がある。

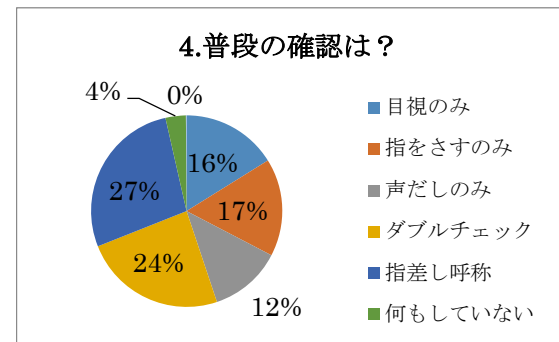
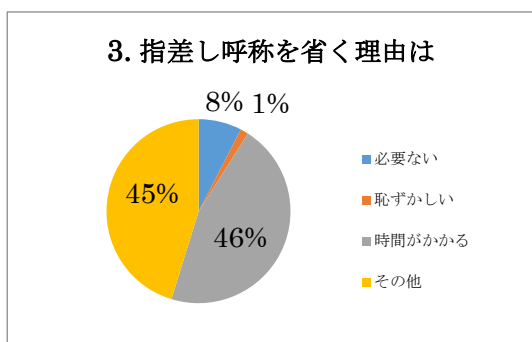
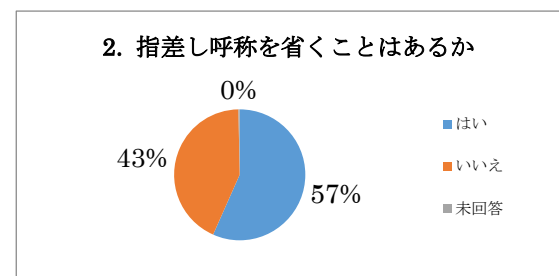
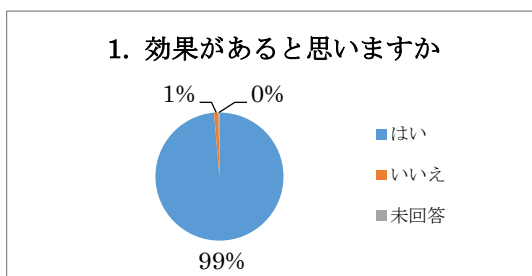
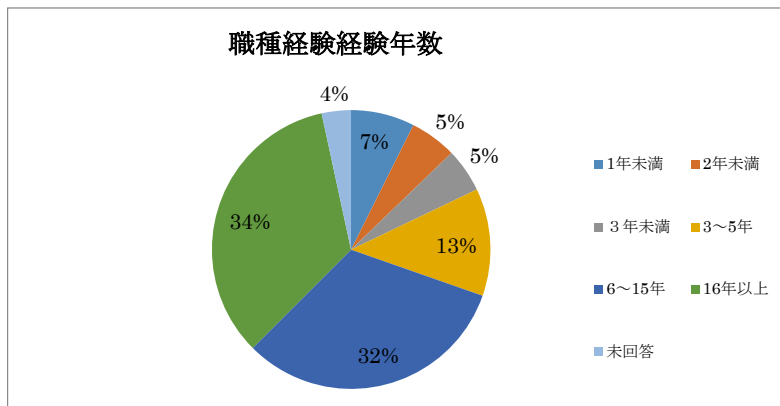
普段の確認方法は、ダブルチェック、指差し呼称が 50%以上を占めているため、継続できるように行動していく。

今回、指差し呼称を省くことがあるかの理由で、その他が 35%→43%へと増加している。回答としては、「忙しい 忘れる」が理由として多くみられており、必要性の再度の周知が必要と思われた。

総合評価として、指差し呼称関連のヒヤリハットは前年度 61.6%から今年度 58.7%と継

続して減少しており、今後も継続活動が必要と考えます。

図



(山本 匡)

院内感染対策委員会

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

病院長、 副院長（感染対策医）、 看護部長、 事務長、 感染対策看護師、 薬剤師、 検査技師、 総務課

2. 1 年間の活動と今後の展望

当院の感染対策委員会は病院長、副院長（感染対策医）、看護部長、事務長、感染対策看護師、薬剤師、検査技師、総務課から構成されています。月 1 回、委員会を開催していますが、迅速な対応、提案を行うために院内スマートフォン、イントラネットを活用して感染症に対する体制を構築しました。また従来の週 1 回の院内巡視に加え、コロナ対策として各部署の感染対策の巡視を追加しました。業務としては

1. 細菌 院内で検出された細菌の種類、耐性菌の動向についてサーベイランスを行い、抗菌薬の感受性を院内共有ファイルからいつでも供覧できるようにしています。尿道留置カテーテルに伴う感染症については当院では ESBL の検出が多く、昨年度から膀胱留置カテーテルについて重点的にサーベイランスを行い、検出菌、抗菌薬使用状況、留置の必要性について検討し抜去を促すように活動を開始し今年度は留置患者数が減少し留置期間が短縮しました。周術期感染もサーベイランスを継続していますが感染症は発生していません。
2. 抗菌薬適正使用 使用する際には菌の同定ができているか、適切に臓器感染症の診断ステップを踏んでいるかなどをその都度確認するように促し菌血症が疑われる場合に常時 2 セットの血液培養を採取しています。各部署に JAID/JSC 2023 感染症ガイド、医療介護施設関連肺炎、市中、院内肺炎ガイドライン、呼吸器学会より 2017 年成人肺炎ガイドライン簡易版を配布。抗微生物薬の適正使用指針を各診察室に常備。カルバペネム系、抗 MRSA 薬のバンコマイシン、テイコプラニン、ハベカシンとタゾピペは届出制で、ザイボックス、シベクトロ、キュビシン及び抗 CDI 薬フィダキソマイシンは許可制です。薬剤師が TDM を作成し適量投与と血中濃度による修正を行っています。抗菌薬の使用状況についても把握し偏りがある場合は医局会で伝達しています。西部地区で耐性菌や抗菌薬使用状況について情報交換を行っています。
3. その他の感染症 新型コロナウイルス患者に対し外来ゾーニングにて患者動線を完全に分離し PPE の実習実施、マニュアルを整備。抗原定量検査(ルミパルス)を導入し診療検査機関として複数検体の院内処理能力を向上させインフルエンザの抗原定量検査も同時に検査。入院時及び時間外にクイックチェイサー（高感度定性）を導入し 1 回の検体採取後 15 分でコロナウイルス、インフルエンザウイルスの判定を行いました。5 類に移行後は各病棟個室で新型コロナウイルス患者の入院治療を施行しました。当院ではがん患者、ハイリスク患者の診療を継続するべくウイルス感染症の侵入防御を行いながら安全に診療ができるように日々努力しています。
4. 教育 各病棟に ICN とリハビリにもリンクスタッフを新設し、対策の徹底や啓蒙活動を行っています。年 2 回、職員全員を対象に院内教育を E-ラーニングにて行いテストに

より理解度を深めました。

5. 院内感染対策マニュアル 国立病院機構の病院感染対策マニュアル 2020 年 3 月増補版を参考にマニュアルを一新しました。新型コロナウイルス感染症に対するマニュアルをイントラネット、電子カルテ内で表示していますがマニュアルにまとめて編集しています。
6. 資材の工夫 酒精綿、消毒スティックはデスポ製品、輸液、注射キット製品の導入などリスクの減少と包交車の廃止を施行しました。プラスチック針で針刺し事故の軽減を図り、個人用手指消毒製品を導入しました。新型コロナウイルス感染症の対応で PPE 再利用についてマニュアルを整備。院内備蓄を管理、報告体制を整えました。
7. 感染対策加算 当院は加算 3 を申請し福岡大学病院等と連携し医療感染対策の向上を図っています。感染対策カンファレンスに定期的に参加しています。手指消毒薬消費量、抗菌薬使用量、検出細菌を所定形式にまとめ JANIS, J-SIPHE に報告しています。

(柴田 隆夫)

院内教育委員会

1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

【構成メンバー】

医師 1 名 看護部 1 名 医療技術部 2 名（放射線技師、管理栄養士） 事務部 1 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

教育委員会の役割は、研修を通して、信頼される医療の提供、質の向上はもとより、全職員の職場環境を改善しより健康的に業務が行えるように支援することにあります。毎月 1 回定例会を開催していますが、活動内容は 1) 研修に必要な物品購入の検討、2) 研修報告の受理、重要な案件の院内への周知、3) 研修の企画、実行、4) 院内の各委員会に依頼して行う研修の計画作成などです。医療安全、救急や感染対策など病院機能に必須の項目を含め幅広く研修を計画しています。今年度は感染対策と利便性の観点から引き続き web を主体とし受講率が低い場合には期間を延長し受講率の改善を図りました。救急蘇生、感染対策の充実のために実習用の人形、手洗いチェック用蛍光灯を購入し各部署で実習を行い診療レベルの維持を図っています。ハラスメント、個人情報についても毎年研修に取り入れています。今年度は新たに認知症を追加しました。必修項目として関連法規については各部署で周知を図るように企画しました。

（柴田 隆夫）

月	テーマ	概要	担当	参加数
4	BLS	Web 研修	救急委員会	355
5	感染対策	Web 研修	感染対策	387
6	ACLS	実習（看護師のみ）	救急委員会	8
7	ハラスメント、虐待	Web 研修	サービス向上	359
9	医療安全	Web 研修	医療安全	384
10	倫理	Web 研修	倫理委員会	397
10	認知症	Web 研修	認知症ケアチーム	365
11	高齢者評価	Web 研修	倫理委員会	358
11	リフレッシュ研修	実習	看護部	20
12	電話対応	Web 研修	サービス向上	387
2	医療安全	Web 研修	医療安全	378
3	感染対策	Web 研修	感染対策	384
3	メンタルヘルス	Web 研修	衛生委員会	265

サービス向上委員会

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

委員構成：事務部長、医事課長、総務課主任、医療技術部主任（理学療法士・放射線技師・臨床工学技士）、看護師 5 名；主任 1 名含む（病棟・外来・地域連携室）

2. 1 年間の活動と今後の展望

今年度の外来患者満足度調査は、12 月の 2 日間で全ての外来患者様を対象として実施しました。多くの患者さんにご協力いただき、回収率は 83.0%と昨年度の 67.2%と比較して大幅に増加し、多様な意見を聴取することが出来ました。これまで課題としていた待ち時間については、10 年ぶりの単独での待ち時間調査を 6 月に実施いたしました。結果を基に TQM 活動に活用するなど、既に取り組んでいる内容もございますが、今後も待ち時間改善に努めるとともに、待ち時間調査を定期的に継続してまいります。その他、2023 年度は、これまでご意見箱等を通じて多くの意見を頂戴していた Wi-Fi 環境の整備を行いました。free Wi-Fi 接続は現在外来フロアに限定されておりますが、今後は病棟を含めた全館での環境整備を計画しています。ご意見箱や入院患者様全員を対象に実施している満足度調査を通じた激励やお叱りなど様々なご意見は、患者サービスに取り組む機会となっております。前期 5.8%に留まった入院患者満足度調査の回収率は、内容の見直しを行い 8.4%に向上しました。引き続き回収率向上を目標の 1 つに掲げて活動を予定しておりますので、当院をご利用の入院患者様には、是非、退院時の満足度調査へのご協力をお願いいたします。私達は、これからも、お寄せいただいた多くの意見を参考に患者サービス向上に向けた取り組みを行ってまいります。

サービス向上委員会がサポート体制を整え、法人全体で取り組んでいる Total Quality Management（TQM）活動は、4 年目を迎え、今期 9 サークルが様々なテーマで活動しました。更に、昨年度に最優秀賞を受賞した 2 つのサークルは、継続効果の検証としての発表を行い、TQM 活動の目標である継続的な改善活動の重要性を職員に伝えて頂きました。サービス向上委員会は、当院が地域の掛かりつけ医療機関として、患者様方から選ばれる病院であり続けることを目標に TQM 活動をサポートする役割を担い、今後も改善活動を推進して参ります。

（北野 晃祐）

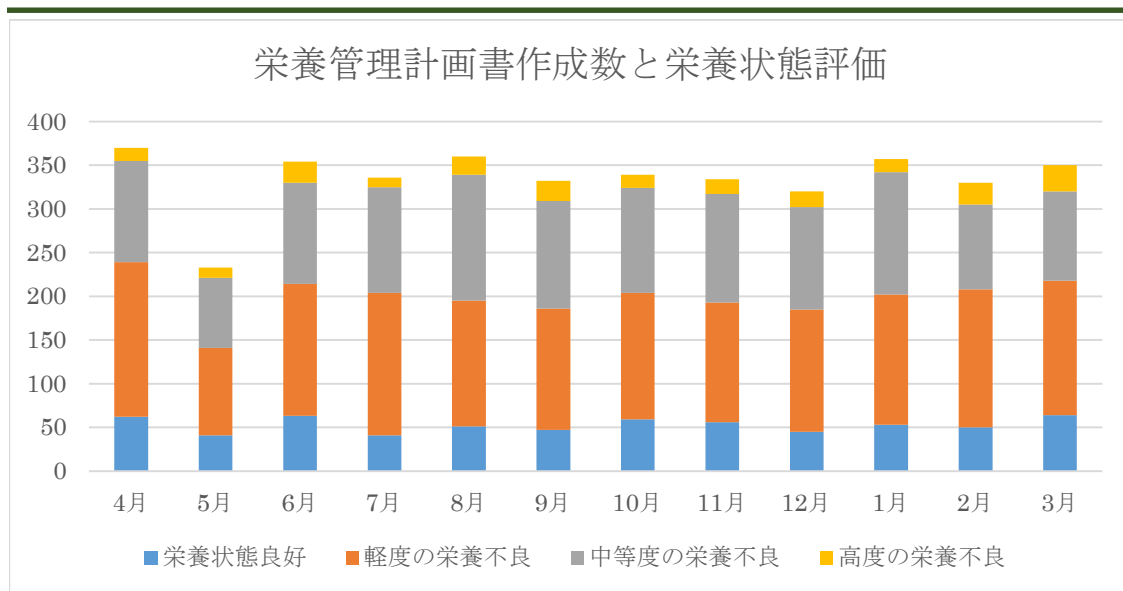
NST 兼栄養管理委員会

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

医師 1 名、 管理栄養士 2 名、 栄養士 1 名
看護師 5 名、 言語療法士 1 名、 薬剤師 1 名

2. 臨床実績



3. 1 年間の活動と今後の展望

活動内容：NST 回診及び検討会（毎週水曜日）

栄養管理委員会（第 2 水曜日）

NST（Nutrition Support Team：栄養サポートチーム）は、最適の栄養管理を提供する為に、他職種で構成された医療チームです。栄養管理は全ての疾患に共通する基本的な医療であり、NST の介入は複数の職種がお互いの知識を持ち寄り、チーム医療を行うことにより最善の治療につなげることが目的となります。

2023 年度は、それぞれの職種から、栄養管理委員会にて、食事に関するオーダー方法の伝達や嗜好調査の報告、勉強会では経管栄養剤に関することや、VF に関して、高齢者糖尿病における食事療法を多職種で情報共有した。それぞれの病棟からの症例報告や考察を通して良かった点や改善点に関してチームで話し合うことができました。

高齢者、嚥下障害、認知症、神経疾患、糖尿病、腎不全（人工透析を含む）、終末期などの様々な患者さんに対し、最適な栄養管理を行い、患者さん・ご家族の不安の軽減、症状緩和や褥瘡の発生を防止し、早期退院や社会復帰を助けることを目指していききたいと思います。

（柳田 育美）

褥瘡対策委員会

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

〈回診メンバー〉

形成外科医師 1 名

褥瘡対策委員長 看護師 1 名

栄養管理士 1 名

理学療法士 1 名

褥瘡対策委員会メンバー：各部署主任 計 9 名

2. 臨床実績（2023 年 4 月～2024 年 3 月）

回診日	第 1, 3 木曜日 14 : 10 ～
入院患者実数	2388 名
褥瘡回診介入数	118 名
褥瘡院内発生数	48 名
院外からの褥瘡持ち込み数	70 名
褥瘡発生率	2.0519%
治癒率	26.495%（完全治癒のみ 一部治癒数は含まず）

3. 1 年間の活動と今後の展望

2023 年度から褥瘡回診に形成外科医が加わり、壊死組織へのデブリートメント等の創傷治癒阻害因子を除去する積極的なアプローチが可能になりました。また、大学病院等で頻繁に行われている物理療法の一つである陰圧閉鎖療法を実践する常勤医師が褥瘡治療に加わる事で、今まで StageⅢ以上の治癒期間を要する方や治癒困難が予測される方の早期治癒が期待できるようになりました。2 週間以上を要するこの陰圧閉鎖療法では専用の医療機器の使用や 2 次障害を防ぐ為に統一したケアが必要です。初めて使用するスタッフが多く戸惑いもありました。その為「陰圧閉鎖療法の手順書」を作成し褥瘡対策マニュアルに加え改定しました。今後は実践する際に活用できる手順書になっているかを確認していく事が課題です。もう一つの課題に褥瘡院内発生数が増加したことがあげられます。褥瘡は圧迫を受けた局所の状態だけでなく、患者の全身状態、さらには社会的状況が複雑に絡み合って発生する疾患です。早期に危険因子を評価し予防対策を講じる事の重要性を実感しました。この結果を各部署で共有し、まずは皮膚の洗浄や保湿クリームによるスキンケアの有効性をスタッフ一人一人が理解し実践できるよう指導を行い、適切なポジショニング、NST（栄養サポートチーム）との協働を行いながら患者様の全身状態、治療方針を理解し、その人を取り巻く社会的状況に応じた治療計画をたてます。2024 年度は常勤医師が褥瘡対策チームに加わり、回診日だけでなくタイムリーな治療介入が出来るようになり悪化防止と治癒期間の短縮化につながると考えます。前年度の課題に挙げていた退院後の状態把握と退院先へのケア指導は継続した目標とし新しく加わる褥瘡対策委員会メンバーも共に努力していきます。

（高田 真弓）

認知症ケアチーム

1. スタッフ紹介（2024年3月31日現在）

医師 1 名 看護師 7 名 薬剤師 1 名 作業療法士 1 名 MSW 1 名
介護支援専門員 1 名 診療情報管理士 1 名

2. 臨床実績

認知症巡回 年間延べ 60 名
臨時巡回 年間 15 名

3. 1 年間の活動と今後の展望

1) 病棟巡回

医師、看護師、薬剤師、作業療法士が、月 2 回（第 1、3 水曜日 14:30～15:30）

依頼があった患者の所へ巡視にいらしています。夜間せん妄、帰宅願望、昼夜逆転、大声を出すなどの BPSD に対して薬剤の調整、院内デイケアの促し今後の方針などを検討しました。せん妄患者に対しては、医師へ直接依頼がありタイムリーに病室訪問し薬剤の調整を行い、認知症回診へ繋げ継続して対応しました。

2) 研修の実施

認知症ケア研修コース（8 コース）を行い参加者 7 名終了しました。

認知症ケアに必要な知識を身につけサービスの質の向上に努めるという目的で講義、DVD 聴取、グループワークなどを行いました。また、施設見学として特別養護老人ホームマナハウスを見学し施設での認知症の対応を学ぶことが出来ました。

看護師 5 名が看護協会主催の認知症研修に参加し、「認知症高齢者の看護実践に必要な知識」を 30 分程度でまとめ、動画にて全職員への勉強会としました。視聴人数は 330 人で 80.7%でした。

3) 院内デイケア

新型コロナウイルスが 5 類になったため午前も開始し従来に戻しました。飲食は控え病棟ごとにテーブルをわけ対応することで院内デイケア参加からのコロナ発症はありませんでした。今年度からボランティアによる紙芝居を導入し事前に案内することで参加を促しています。

4) 今後の展望

認知機能低下やせん妄の患者は年々増加しています。職員は対応に追われている状況は変わりません。認知症ケアチームは、患者さんが穏やかに過ごせるように、また職員の疲弊感を軽減できるように継続して努めていきたいと思っています。新型コロナウイルスが 5 類になり出来るだけコロナ禍前に戻せるように対応していますが、病棟のクラスター発生時は院内デイケアを中止せざる負えない状況です。以前は院内デイケアで飲むコーヒーやお茶がおいしいと好評だったため、提供できる日を待ち望んでいます。

（江口 敦美）

地域振興委員会

1. スタッフ紹介（2024 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

放射線技師 1 名 理学療法士 1 名 臨床検査技師 1 名 看護師 1 名
介護福祉士 1 名 視能訓練士 1 名 ケアスタッフ 1 名 総務 1 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

病院 35 周年記念行事を契機として、「地域振興委員会」は継続した地域貢献活動を実施することを目的として 2018 年 7 月に発足いたしました。2023 年度は、けいあい保育園から、コロナ禍の時に手作りの防護服を頂いていました。その防護服は、保育園の先生達が、ビニールシートを服の形に切り、そこに園児達が、「頑張ってください。」などのメッセージや可愛い絵を添えて作ってくれていました。

コロナ禍も落ち着いてきたので、そのお礼を当院として何か出来ないかと委員会のメンバーで考えました。やはり、保育園なので絵本が良いのではないかと結論に至り、どの絵本が良いかを委員会メンバーで選定しました。

そのお礼の絵本を持って、保育園を訪れた際に、NHKの取材のカメラも来ており、絵本を先生にお渡しするのに、すごく緊張したのを覚えています。奇跡的に保育園が持っていない絵本を選定出来ていて、先生や生徒さん達がすごく喜んで下さっていたので、すごく嬉しかったです。

また、地域で毎月 1 回行われている、ふらっとカフェという行事にも、医療技術部から、各部署持ち回りで、色々な企画を考え地域住民の方に楽しんでもらえる様なイベントを開催していこうと始めてまいりました。地域住民と触れ合いながら、当院のアピールにもつながればと考えています。

今後は、当院をもっとアピールできるようなイベントを開催して、当院の認知度を高めたいと思っています。そして、地域にとって安心して頼れる病院となれるように、地域活動を行っていききたいと思います。

（塚園 慎也）

サービス付き高齢者向け住宅かりん

(訪問介護事業所かりん、通所介護事業所かりん)

1. スタッフ紹介 (2024年3月31日現在)

施設長(看護師) 1名 事務 1名
訪問介護：サ責(看護師) 1名 介護福祉 12名 ヘルパー2名 准看護師 1名
通所介護：主任(介護福祉士) 1名 介護福祉 3名 看護師 1名
ヘルパー1名 無資格 1.6名 計 25.6名

2. 実績

<入居者状況> 平均年齢：88.5歳 平均介護度：29.8 平均入居率 96%
<新入居者> 17名 紹介元 病院関連：7名 外部ケアマネ：1名 家族：9名
<退居者> 20名 別施設：5名 自宅：0名 長期入院：0名
死亡：15名(施設看取り 12名)

3. 1年間の活動と今後の展望

1) サービス付き高齢者向け住宅 かりん

目標

- ① 安定した経営：目標額 1,800 万円/月 収益平均 17,385 万円目標達成率 96%
- ② 職員が各自目標を掲げ、人材育成をしていく(志高一心)：
喀痰吸引資格取得研修・上級救命研修・学習療法マスター
防火管理者講習等受講しスキルアップに努めました。また SDGs への取り組み
に関してはペットボトルキャップ回収を行い「海外の子供達へワクチンを」に賛同し
活動を行いました。今年度は 10 名弱分でしたが送ることができました。今後も継続し
て行っていく予定です。
- ③ 理念を大切に成長・挑戦し続ける企業：理美容料金にカンボジア孤児への寄を含んだ
業者を採用し収益の一部を寄付、また石川県能登半島地震災害への寄付金を集め送金
を行いました。今後も継続していきます。

2) 訪問介護事業所 かりん

目標

- ① 利用者本位の参加型介護過程が展開できる：入居時に受け持ちスタッフが本人の意を
確認し基礎情報・計画立案しスタッフ皆で共有しています。
まだ介護過程の展開は十分ではないですが、少しずつ意識的に行えるようになってき
ています。
- ② 介護を丁寧に皆が同じレベルで出来る様になる：今年度は TQM 活動で排泄や環境を
整える事に取り組み、ある程度の成果に繋がりました
- ③ 事例発表 <よつばの会にて>
ALS 入居者を介護して～「食べたい」を支援する～

(発表者 波多江 祐)

3) 通所介護事業所かりん

目標

① 利用者参加型の園芸・おやつ作り・外出等を行う:コロナ禍で外出が十分できなかったが、コスモス見学、節分祭で飯盛神社参拝を実施できました。久しぶりの外出を皆さんと喜びました。また定期的に利用者さんと共におやつ作りを行い、美味しく食べることが出来ました。

② くもん学習療法を認知予防の一環として実施

学習指導士育成・学習療法利用者を増やす:くもん学習指導士育成を継続的に行っていますが、くもん学習者は対象者が減少し、20名を目標としていましたが65%の達成率でした。

今後も地域社会に貢献するという使命を継承し、医療連携という強みを生かしながら、入居者さんが安心して心地よく生活できる場の提供を行ってまいります。また職員一人一人のワークライフ・バランスを推進し働きやすい職場作りに努めていきたいと思っています。

(坪山 由香)

業 績

学会・研究会発表・講演等

演題名	発表者・共同演者	年月日	開催地	名 称
脳神経内科				
Glioblastoma を合併した筋強直性ジストロフィー1 型の 1 例	田村重征, 三嶋崇晴, 藤岡伸助, 榎本年孝, 青木光希子, 森坪麻友子, 古田拓也, 坪井義夫	2023 年 6 月 24 日	WEB/ 久留米大学	第 240 回日本神経学会九州地方会
脳幹の punctate pattern を契機に診断した ATL 関連 PML の 1 例	田村重征, 三嶋崇晴, 中島勇太, 山田猛, 柴田隆夫, 藤岡伸助, 坪井義夫	2023 年 9 月 23 日	WEB/ 大分大学	第 241 回日本神経学会九州地方会
在宅診療部 在宅診療科				
訪問診療における摂食嚥下機能障害の事例紹介	田代博史	2023 年 8 月 26 日	福岡大学 病院	第 19 回日本神経摂食嚥下・栄養学会学術集会福岡大会
在宅療養支援病院における神経難病の訪問診療	田代博史	2024 年 2 月 19 日	小野薬品 福岡支店	パーキンソン病治療セミナー
健康増進・糖尿病センター				
高齢糖尿病患者の認知機能と生活機能障害～DASC - 21 の結果から～	柴田さおり、藤川太一、木村一喜、山口良樹、吉田亮子	2023 年 5 月 28 日	福岡	第 14 回 CDEJ 連絡会講演会
CKD 診療 病診連携を進めるためのボトルネックと解決策～当院における病診連携の現状と診療体制～	吉田亮子	2023 年 11 月 21 日	WEB	Stop CKD in 福岡エリア
SGLT2 阻害薬内服中でのケトアシドーシス・ケトアシドーシスの 3 例と当院での SGLT2 阻害薬の使用状況	吉田 亮子 柳田育美	2023 年 9 月 19 日	WEB	第 536 回福岡市糖尿病アーベント
GLP-1 受容体作動薬の使用経験	吉田 亮子	2024 年 3 月 15 日	福岡	ジョイ Meeting in 福岡西地区

業 績

学会・研究会発表・講演等

演題名	発表者・共同演者	年月日	開催地	名 称
リハビリテーション科				
高齢糖尿病患者の認知機能と生活機能障害	柴田 さおり	2023 年 5 月	福岡	福岡県糖尿病研修会
Relationship between frontal lobe dysfunction and fear of falling in people with Parkinson's disease	山口 良樹	2023 年 5 月	シカゴ	International Association parkinsonism and related disorders 2023 World congress
脊髄小脳変性症、多系統萎縮症のリハビリ（嚥下・高次脳機能評価などを踏まえて）	木村 一喜	2023 年 6 月	北九州	難病医療従事者研修会
パーキンソン病患者に対する低頻度の呼気トレーニングの効果について	木村 一喜	2023 年 7 月	大阪	第 17 回パーキンソン病・運動障害疾患コンgres
言語聴覚士を中心とした多職種連携により在宅で経口摂取を継続した 2 症例	岡 久美	2023 年 8 月	福岡	第 19 回日本神経摂食嚥下・栄養学会学術集会
施設入所者の誤嚥性肺炎に対する地域密着型病院の役割の検討	木村 一喜	2023 年 8 月	福岡	第 19 回日本神経摂食嚥下・栄養学会学術集会
脊髄小脳変性症と多系統萎縮症における認知機能障害の検証	木村 一喜	2023 年 11 月	名古屋	第 11 回 日本難病医療ネットワーク学会学術集会
姿勢反射障害による転倒が短期間の理学療法により減少したパーキンソン病患者 1 例	塚本 幸子	2023 年 11 月	名古屋	第 11 回 日本難病医療ネットワーク学会学術集会
パーキンソン病および関連疾患患者に対する完全側臥位法の効果の後方的検証	齋藤 正直	2023 年 11 月	名古屋	第 11 回 日本難病医療ネットワーク学会学術集会
終末期がん患者に対する Palliative Prognostic Index を用いた早期退院に向けた作業療法	有川 雄大	2024 年 2 月	静岡	第 12 回がんリハビリテーション研究会

TQM活動

サービス向上委員会

2023 年度 TQM 活動発表大会結果

賞	サークル名	部署	活動テーマ
最優秀賞	Project L	2 階南病棟	日勤リーダー業務のスリム化を図り、時間外業務を削減
優秀賞	サコウジュファイターズ	サ高住	ケアの方法の統一

2023 年度 村上華林堂病院年報

発 行：2024 年 10 月

編 集：病院年報編集委員会

委 員 長：山田 猛

委 員：江口敦美

：北野晃祐

：久間伸彦

：西島勝也

：宮原美佐
